山形県埋蔵文化財センター調査報告書第199集

出張坂城跡第1・2次発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

出張坂城跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第199集

2012

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

出張坂城跡

（でっぱりざかじょうあと）

第１・２次発掘調査報告書

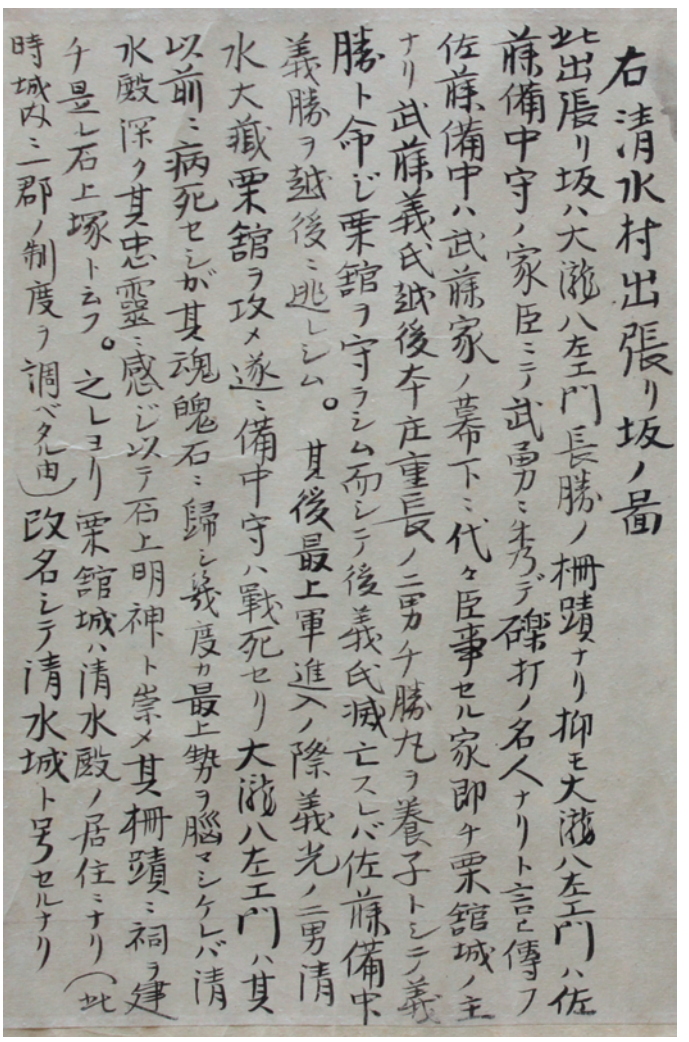
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第199集

平成 24 年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

出張坂城跡　全景　（北東から）

『庄内領郡中名勝旧蹟図絵』より「清水村出張り坂ノ圖」（鶴岡市郷土資料館蔵）



右清水村出張り坂ノ圖

出張り坂ハ大滝八左エ門長勝ノ柵蹟ナリ抑モ大滝八左エ門ハ佐
藤備中守ノ家臣ニテ武勇ニ秀デ礫打ノ名人ナリト言ヒ傳フ
佐藤備中ハ武藤家ノ幕下ニ代々臣事セル家即チ栗舘城ノ主
ナリ武藤義氏歿後本庄重長ノ二男チ勝丸ヲ養子トシテ義
勝ト命ジ栗舘ヲ守ラシム而シテ後義氏滅亡スレバ佐藤備中
義勝ヲ越後ニ逃レシム。其後最上軍進入ノ際義光ノ二男清
水大藏栗舘ヲ攻メ遂ニ備中守ハ戰死セリ大滝八左エ門ハ其
以前ニ病死セシガ其魂魄石ニ歸シ幾度カ最上勢ヲ惱マシケレバ清
水殿深ク其忠靈ニ感ジ以テ石上明神ト崇メ其柵蹟ニ祠ヲ建
チ畳ヒ石上塚トヒフ。之レヨリ栗舘城ハ清水殿ノ居住ニナリ（此
時城内ニ郡ノ制度ヲ調ベタル由）改名シテ清水城ト号セルナリ

「清水村出張り坂ノ圖」　本文

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、出張坂城跡の調査成果をまとめたものです。

出張坂城跡は、山形県西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は庄内平野の南部に位置し、西は日本海、東に出羽三山、北に鳥海山をのぞむ自然景観豊かなところです。歴史的にも後期旧石器時代以来数多くの遺跡が確認されています。国指定史跡で県内有数の規模を誇る山城の小国城跡や県指定史跡の荒沢古窯跡群、十五里ヶ原古戦場など重要な遺跡も多く存在しています。江戸時代には徳川四天王の筆頭である酒井氏が入部し、以後約250年にわたって城下町として発展してきました。最近は歴史小説を映画化した舞台として脚光を浴びるなど、歴史的風土の豊かな土地柄です。

この度、国道７号鶴岡バイパス建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、出張坂城跡の発掘調査を実施しました。調査では、大量の炭と焼土を含む溝跡や、２間×２間の総柱の掘立柱建物を構成したと考えられる柱穴などが検出され、城館構造を探る上で多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成24年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　相馬周一郎

凡　　例

1　本書は、国道７号鶴岡バイパス建設に係る「出張坂城跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は、国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は福岡和彦、佐藤智幸が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、斉藤敏行、安部実、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＤ…溝跡　　ＳＰ…ピット・柱穴　　ＳＸ…性格不明遺構

ＥＢ…建物跡構成柱穴　　ＲＰ…登録土器　　Ｓ……自然礫　　W……自然木

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産技術会議事務局監修の「新版　標準土色帖」によった。

9　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々から御協力、御助言をいただいた。（敬称略）

鶴岡市郷土資料館　秋保良

調 査 要 項

遺跡名	出張坂（でっぱりざか）城跡		
遺跡番号	203-019		
所在地	山形県鶴岡市下清水字水尻		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所		
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
受託期間	平成22年11月１日～平成23年３月31日		
	平成23年４月１日～平成24年３月31日		
現地調査	平成22年11月１日～11月30日（第１次調査）		
	平成23年５月９日～６月17日（第２次調査）		
調査担当者	平成22年度	調査課長	阿部明彦
		課長補佐	伊藤邦弘
		主任調査研究員	福岡和彦（調査主任）
	平成23年度	調査課長	安部実
		整理課長	斉藤敏行
		考古主幹	伊藤邦弘
		考古主幹	黒坂雅人
		主任調査研究員	福岡和彦（調査・整理主任）
		調査員	佐藤智幸
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課		
調査協力	鶴岡市教育委員会		
	山形県教育庁庄内教育事務所		
業務委託	基準点・地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務　株式会社石川測量事務所		
	理化学分析業務　株式会社加速器分析研究所		
発掘作業員	伊藤雅子　大瀧元子　佐々木陽子　佐藤幸子　佐藤ミヤエ　佐藤彌太郎　佐藤庸子		
	武田桂三　田澤福井　忠鉢弥一郎　成田七郎　野尻松雄　本間京子　本間金二		
	矢口悦子　若公四郎		
整理作業員	安達久恵　佐竹敬次		（五十音順）

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　　1　調査に至る経緯……1
　　2　発掘調査の概要……1
　　3　整理作業の概要……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　　1　地理的環境……3
　　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査の成果
　　1　遺跡の概要……8
　　2　調査の方法……9
　　3　検出遺構……10
　　4　出土遺物……11
Ⅳ　理化学分析
　　1　放射性炭素年代……30
Ⅴ　調査のまとめ……33

報告書抄録……巻末

表

表１　遺跡位置図の遺跡名と時代……7
表２　遺物観察表……12
表３　分析試料……31
表４　測定結果（１）（２）……31・32

図　版

第１図　調査区概要図……2
第２図　地形分類図……5
第３図　遺跡位置図……6
第４図　出張坂城跡縄張図……13
第５図　遺構配置図（１）……14
第６図　遺構配置図（２）……15
第７図　第２トレンチ土層断面図（１）……16
第８図　第２トレンチ土層断面図（２）……17
第９図　第１トレンチ土層断面図……18
第10図　Ｂ区遺構配置図……19
第11図　ＳＸ１集石遺構・ＳＤ２溝跡……20
第12図　ＳＢ19掘立柱建物跡……21
第13図　ＥＢ３・４・９、ＳＰ５・６ピット……22
第14図　ＥＢ14・15・16、ＳＰ12・17・18ピット……23
第15図　縄文土器・土師器・須恵器系陶器・瓦質土器……24
第16図　瓦質土器・陶磁器……25
第17図　陶磁器……26
第18図　陶磁器……27
第19図　陶磁器……28
第20図　陶磁器・土製品・銭貨……29
第21図　暦年較正年代グラフ……32

写真図版

巻頭写真１　出張坂城跡　全景
巻頭写真２　『庄内領郡中名勝旧蹟図絵』より「清水村出張リ坂ノ圖」（鶴岡市郷土資料館蔵）
「清水村出張リ坂ノ圖」本文
写真図版１　出張坂城跡　空中写真（昭和37年）
写真図版２　調査区全景、Ａ区・Ｂ区平場近景
写真図版３　Ａ区平場検出・完掘状況
写真図版４　Ｂ区平場検出・完掘状況
写真図版５　Ｃ区・Ｄ区平場完掘状況
写真図版６　ＳＸ１検出・完掘状況
ＳＤ２検出状況・土層断面
ＳＤ２東側・西側検出部完掘状況
ＲＰ１出土状況、ＳＤ２精査状況
写真図版７　ＥＢ３・４、ＳＰ５・６土層断面・完掘状況
写真図版８　ＥＢ９・14・15・16土層断面・完掘状況
写真図版９　縄文土器・土師器・須恵器系陶器・瓦質土器・陶磁器
写真図版10　陶磁器
写真図版11　陶磁器
写真図版12　陶磁器・環状土製品
写真図版13　銭貨・ＳＤ２出土鉄製品

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

出張坂城跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所による国道７号鶴岡バイパスの拡幅工事に伴い実施された。国道７号は新潟市から青森市へ至る、東北地方の日本海側を縦断する総延長471.3㎞の一般国道で、それら地域の経済・産業・文化を担う重要な大動脈となっている。このような状況の中、日本海東北自動車道建設により鶴岡西インターチェンジが設置されることとなり、交通量の増加が見込まれることから、併せて国道７号鶴岡バイパスも４車線へと拡幅されることになった。そこで、本遺跡について国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所と山形県教育庁文化財保護推進課との間でその取り扱いについて協議がもたれた。その結果、建設事業に先立つ記録保存のための緊急調査を、財団法人山形県埋蔵文化財センターが行うことになった。

2　発掘調査の概要

出張坂城は、16世紀に武藤氏が居城した城として知られており、昭和33年（1958）に国道７号、昭和44年（1969）には鶴岡鉄工団地の造成により大幅な削平を受け、主曲輪の大部分が消滅した。また、現存する部分も国道７号鶴岡バイパスの拡幅工事に伴い削平されることとなり、平成22・23年度に発掘調査を実施することとなった。

該当範囲の遺構・遺物の分布状況を把握し本調査に向けての詳しいデータを収集するため、第１次調査が平成22年11月１日～30日まで行われた。それを受けて平成23年度の第２次調査は、５月９日～６月17日まで、事業範囲のうち600㎡を対象にして行った。調査は、現場への器材搬入、調査区の設定、手掘りによる表土除去、遺構検出のための面整理と面精査を進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの手順を踏んだ。また、各段階で写真撮影を行い、一連の調査作業が記録として辿ることができるように配慮している。以下には発掘調査の経過について、その概要を週単位で記述する。

第１次調査：平成22年11月１日～11月30日

該当範囲の遺構・遺物の分布状況を把握し本調査に向けての詳しいデータを収集するため、事業範囲内の雑木の伐採及び地形測量、基準点測量を行った。

第２次調査：平成23年５月９日～６月17日

５月９日～５月13日（第１週）:調査区の環境整備（除草作業や雑木の伐採）や調査区が急な斜面に面しているため、階段を設置し安全の確保を図った。また、土層の堆積状況確認や遺構検出のため２本のトレンチを設定し、各平場にそれぞれＡ～Ｄの各調査区を設定した。

５月16日～５月20日（第２週）：調査区の場所を表すため、測量して杭打ちを行った。また、斜面から平場になっている区域の表土を削って遺構検出を行った。

５月23日～５月27日（第３週）:Ｂ区より集石遺構（ＳＸ１）を検出し、さらに焼土と炭を大量に含んだ溝状の遺構（ＳＤ２）も確認。また、第２トレンチの最下段を50㎝ほど掘り下げたところ、15～16世紀代と考えられる珠洲産の擂鉢片が出土した。

５月30日～６月３日（第４週）：第２トレンチの断面図を作成した。また、集石遺構（ＳＸ１）を半裁し、その断面の記録作業を行った。

６月６日～６月10日（第５週）：Ｂ区の溝跡（ＳＤ２）の掘り下げを行う。その結果、大量の炭や焼土とともに、焼けた石や釘等の鉄製品が大量に出土した。

６月13日～６月17日（第６週）：14日にラジコンヘリを用いての空中写真撮影を実施。16日に関係者による調査説明会を開催し、約20名の参加者を得た。終了後、国土交通省酒田河川国道事務所に現地引渡しを行った。翌17日に器材及び事務所の撤去を行い、現地での発掘調査を終了した。

3　整理作業の概要

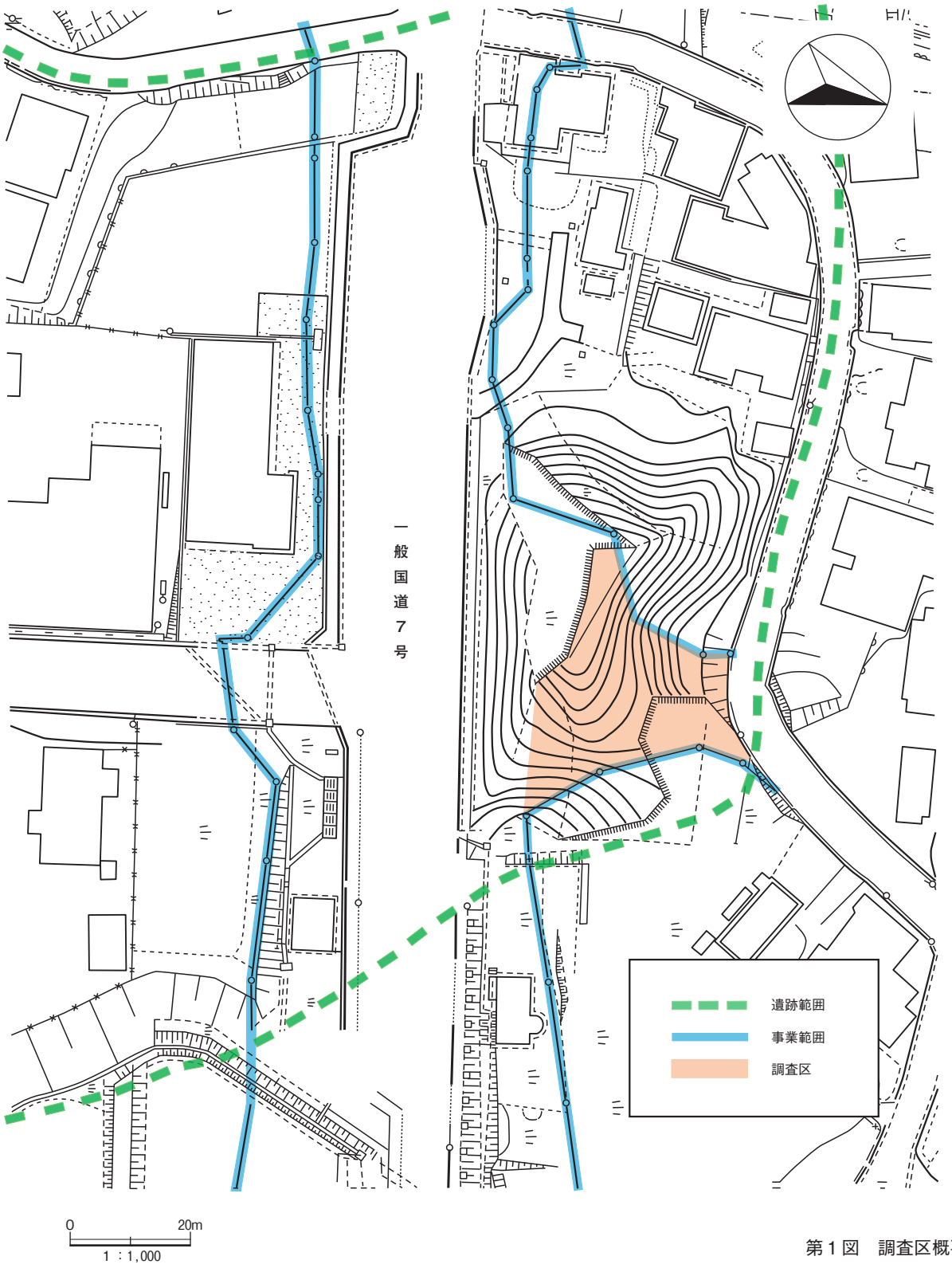
報告書刊行は平成23年度とされていることから、整理作業は現地での発掘調査終了後、６月20日から行い、第２次調査で出土した遺物の洗浄・注記といった基礎整理

作業を行った。遺物への注記は、遺跡名はカタカナで「デッパリザカ」とし、出土地点としてグリッド名や遺構名を明記した。その後、遺物を種類ごとに分類し、接合・実測・拓本・写真撮影を行った。

遺構・遺物の実測図はデジタル処理による編集を行った。なお、遺構配置図については、遺構測量の業務委託によるデジタルデータに基づいて作成した。

理化学分析として、ＳＤ２採取の炭化物の年代測定を業務委託により行った。分析結果については、第Ⅳ章に掲載した。

また、各種作業と併行して本文執筆及び編集作業を行い、本書の刊行に至った。



第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

出張坂城跡は、山形県鶴岡市下清水字水尻に所在し、鶴岡市役所から西へ約５㎞、大山川と湯尻川に挟まれた標高30～50m、比高15～35mの丘陵上に立地しており、現在、丘陵の大部分は鶴岡鉄工団地として造成され、各種工業製品の製造拠点となっている。

出張坂城跡が位置する鶴岡市は、山形県庄内総合支庁管内にあり、日本有数の穀倉地帯として知られている庄内平野の南部に位置する。平成の大合併により、従来の鶴岡市、藤島町、羽黒町、櫛引町、温海町、朝日村の一市四町一村が併合し、平成17年（2005）に新生鶴岡市が誕生した。

鶴岡市が位置する庄内平野は、北に「出羽富士」と称され、秋田県と連なり標高2,236mと山形県最高峰の鳥海山、東に月山・湯殿山・羽黒山の「出羽三山」として有名な出羽山地、南に新潟県と連なる朝日山地、西には日本屈指の規模を誇る庄内砂丘及び日本海と、四方を峰々や海に囲まれた地形である。そのため、最上川水系や赤川水系によって形成された肥沃な土壌と日本海に面した巨大な砂丘によって、稲作に加え「庄内メロン」や「だだちゃ豆」といった特産品の栽培がさかんである。なかでも、本遺跡周辺では大山川によって形成された栄養分が豊富な砂質土壌により、地域特産の「白山だだちゃ豆」の畑が広がっている。また、積極的な耕地整理事業を行っており、ほ場整備に伴う用排水路の整備や揚水機の設置に加え、水稲の品種改良が進み、現在では「はえぬき」や「つや姫」といった高品質米の生産もさかんである。

気候は、日本海に面する庄内地方と内陸部とでは異なり、本遺跡が属する庄内地方は日本海の影響を受ける海洋性の気候であり、特に冬季は内陸に比べ降雪量は少ないものの、風が強く地吹雪等が頻繁に起き、海岸部では「波の花」と呼ばれる現象が発生し、岩場が白い泡で一面包まれ、泡が風に乗り空中を漂う幻想的な光景を見ることができる。

2　歴史的環境

A　歴史的環境

鶴岡市の遺跡は、前述した市町村合併により、その総数は約600か所に上る。鶴岡市にある主な遺跡を時代順に概観すると、後期旧石器時代の遺跡としては朝日地域にある越中山（えっちゅうやま）遺跡群が著名であり、東北地方における旧石器研究のさきがけとなった遺跡群である。越中山Ａ遺跡からは尖頭器、ナイフ形石器、掻器等が出土している。越中山Ｋ遺跡からは瀬戸内技法を用いたナイフ形石器が多く出土しており、石材も、頁岩、流紋岩、鉄石英、玉髄、凝灰質砂岩というように、極めて多彩である（渋谷2009）。越中山Ｓ遺跡は、細石刃が多く出土したことで知られている。

縄文時代では、中山地区にある西向遺跡がある。同遺跡は、縄文時代中期前葉及び末葉の遺跡であり、大木７ａ・７ｂ式に加え、北陸地方の土器型式である新保式・新崎式土器が多く出土している。また、黒曜石製の石鏃６点のうち、３点が信州産であり、縄文時代中期における他地域との交流を考えるうえで重要な遺跡である。

鶴岡市で現在まで確認されている弥生時代の遺跡はあまりない。隣接する酒田市では弥生時代前期の遺跡として生石（おいし）２遺跡がある。同遺跡では、砂沢系土器と遠賀川系土器、折衷系の土器が出土したことで知られている（山形県教委1987）。

古墳時代については、日本海側における最北端の古墳が鶴岡市に所在する。菱津地区にある菱津古墳と藤島地域にある鷺畑山古墳群である。菱津古墳で現存するのは伝世品である凝灰岩製の組合せ式長持型石棺があるが、墳丘は失われているため、その形態や発見時の状況等は不明である。なお、石棺の年代は５世紀末～６世紀初頭とされている（鶴岡市史編纂会2011）。鷺畑山古墳群は発掘調査は行われておらず、出土遺物等も知られていないが、測量調査により、５世紀後半～６世紀前半の年代が与えられている（鶴岡市史編纂会2011）。

一方、古墳時代の集落遺跡は、多くの遺跡がこれまでに発見・調査されている。古墳時代の集落遺跡を垣間見ると、山田地区にある山田遺跡があげられる。同遺跡からは５・６世紀代の年代が与えられる土師器・須恵器といった遺物が出土したが、なかでも特筆すべきは竪穴住居から出土した続縄文土器（北大Ⅰ式）の鉢と、祭祀との関わりが指摘される琥珀の粒が入ったミニチュア土器である。また、田川地区にある興屋川原遺跡からは子持勾玉が出土しており、年代は、同遺跡出土の土師器・須恵器から５世紀末～６世紀中葉とされる。以上のように、古墳時代は菱津古墳や鷺畑山古墳群の存在に加え、続縄文土器の出土といった点においても、ヤマト政権の勢力と北方の勢力双方との接点・交流があったことが窺えよう。

古代では、さらに遺跡数は増加するが、「生業」といった点にスポットを当てる（植松・佐藤智2011）と、庄内地方全体で計57遺跡から生業関連の遺物が出土しており、その中で鶴岡市の遺跡は12遺跡ある。年代的には全体的に９世紀前半から10世紀後半に集中しており、前述した興屋川原遺跡では、古代の遺物・遺構についても多くの木製農具・紡錘具に加え、製塩土器、製鉄関連として羽口や鉄滓、焼土遺構が出土･検出されている。また、下川地区の西谷地遺跡では、遺跡を取り巻く区画溝や鍛冶工房が検出されており、羽口、坩堝、鉄滓といった製鉄関連の遺物が多く、その他製塩土器、土錘などが出土している。

なお、中世以降については次章で述べるので、重複する部分もあり、紙面の都合上、ここでは割愛する。

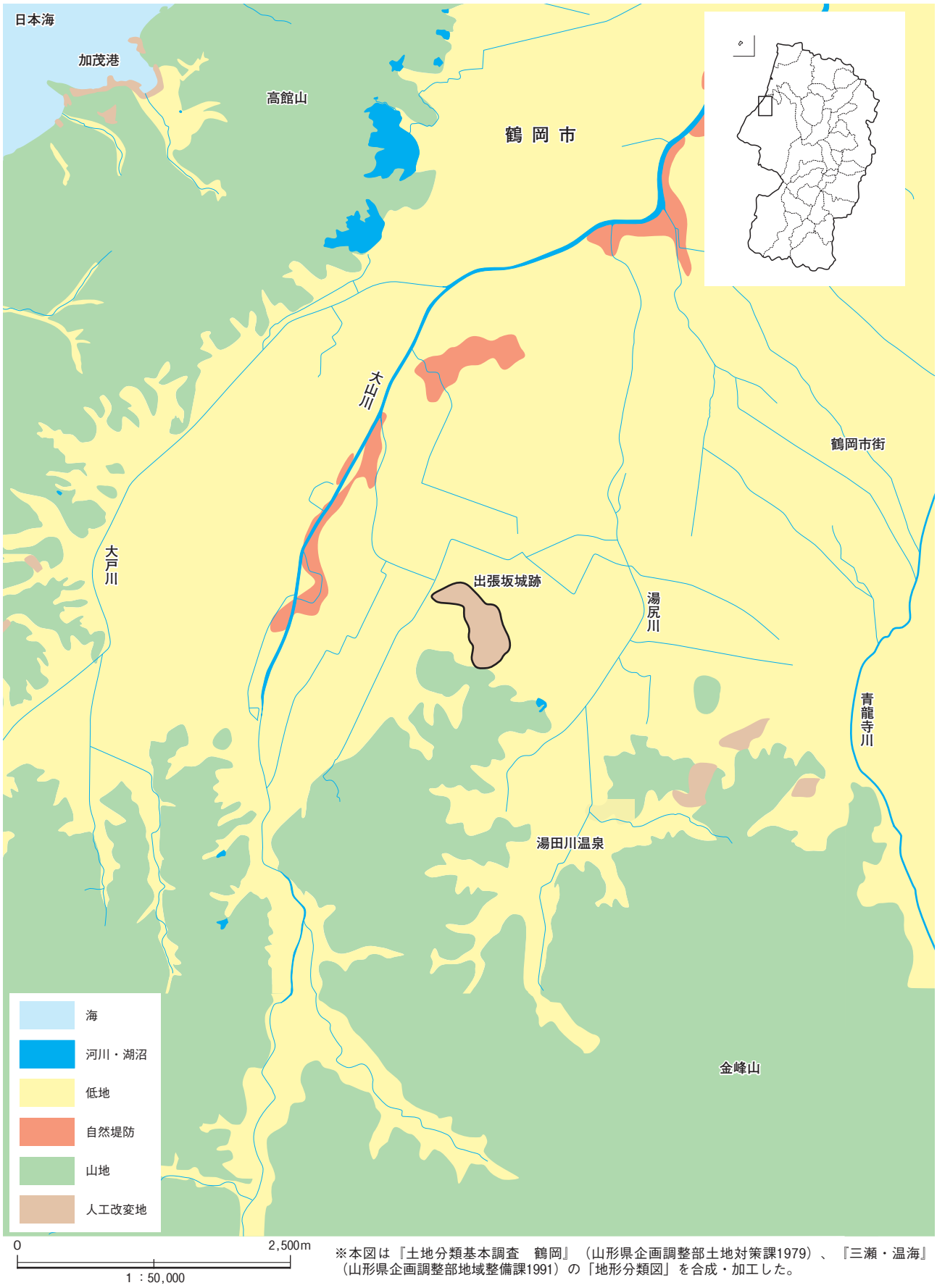
B　モリ供養

出張坂城跡が位置する下清水地区は、隣接する中清水・上清水地区とともに、「庄内のモリ供養の習俗」（以下、モリ供養）が残ることで知られている。ところで、モリ供養の「モリ」とは、「霊格の高い祖霊に昇華する以前の死霊がとどまる山」（戸川1973）であり、そのモリにおいて死霊を現世とは隔てたあの世へと導くための供養のことである。清水地区のモリ供養は、下清水地区にある天翁寺を中心とする清水地区の４つの寺院により、同地区内にある三森山の山中にある「優婆堂」、「閻魔堂」、「大日堂」、「観音堂」、「地蔵堂」、「仲堂」、「阿弥陀堂」の７つの堂を中心に行われており、山中には石碑や石塔がいたるところに建立されている。なお、このモリ供養は平成12年（2000）に、記録作成等の措置を講ずべき国指定無形民俗文化財になっている。

現在、庄内一円で行われているモリ供養の中でも、清水地区のモリ供養はとりわけ歴史が深く、1700年代に書かれた『出羽国風土記』には既にモリ供養の記述があり、また三森山の山中に宝暦13年（1762）に建立された石塔がある（山形県教委2009）ことから、少なくとも近世（1700年代）には行われ、現在に続いていることが窺える。

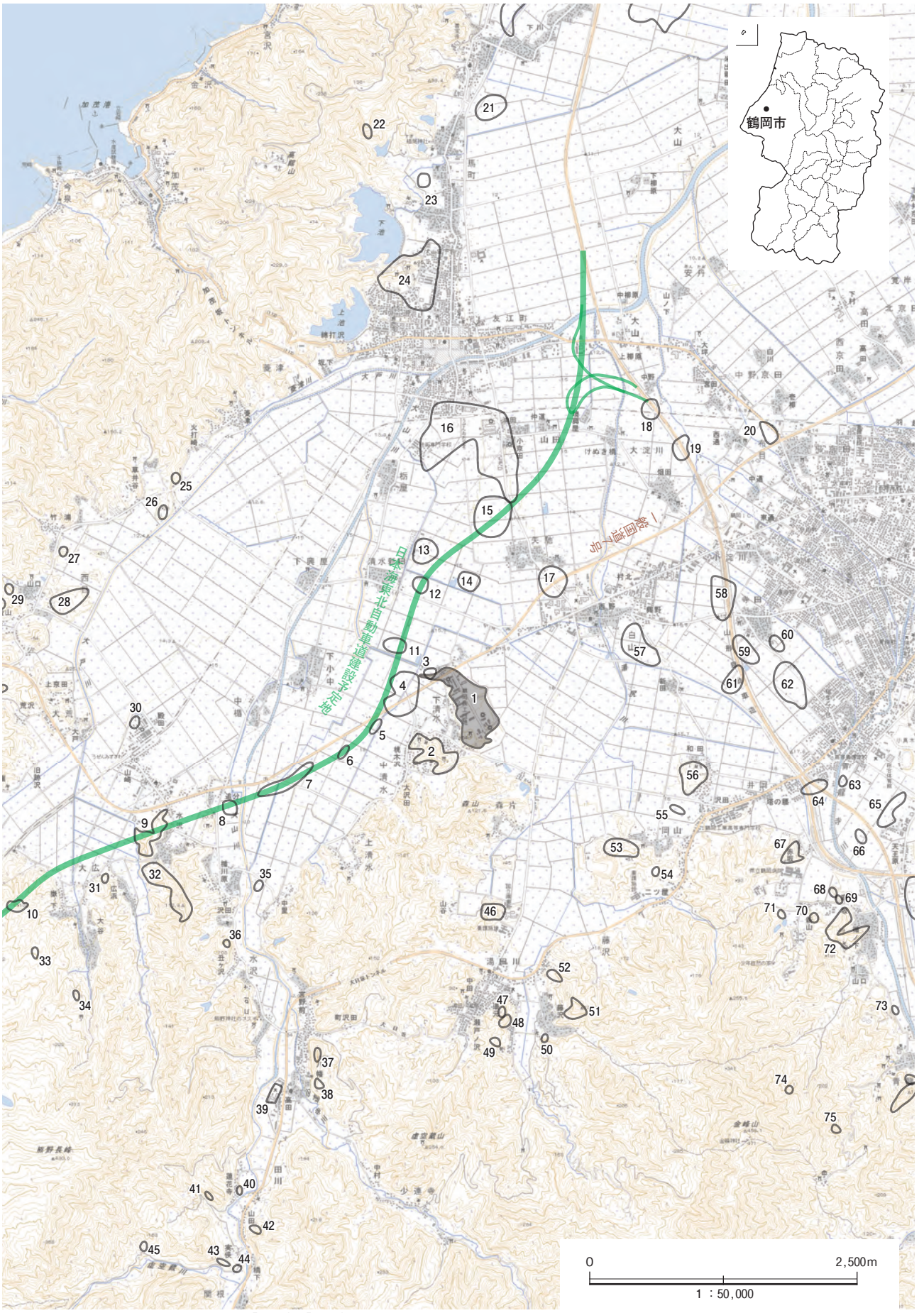
さて、モリ供養が行われる毎年８月22･23日には、「清水のもりのやま」として、清水地区の住民をはじめ、多くの参拝者が供養の行われる三森山に集まる。昭和31年（1956）に刊行された『大泉村史』によれば、「清水の森といえば、庄内では知らないものはない程死霊信仰の立場から知られて」おり、「大人に限らず子供も一年中の行事が数ある中で最大のものとしてむかえられ」、「正月や節句や神社の祭礼などをはるかに越して」、「村中の一大まつりといっても過言ではない」（傍点は執筆者追加。同書79・80ｐ）行事である。なお、現在では行事の形骸化が進み、会場となる堂が山中の峰々にあること、参拝者の高齢化、また信仰の薄れも相成り、かつてほどの盛大さはみられない。鈴木岩弓によれば、庄内一円で行われている現在のモリ供養は、「庄内地方を中心に、盆の時期にモリと呼ばれる特別な場所や寺の本堂で行われる有縁無縁供養」であり、以前のモリ供養は「庄内地方を中心に、盆の時期にモリと呼ばれる特別な場所において行われる有縁無縁供養」と定義されている（傍点は執筆者追加。鈴木2009）。清水地区のモリ供養は現在でも後者の形態を保っている点が特筆される。

モリ供養については、民俗学的なアプローチはこれまでに多くなされ（戸川1973、山形県教委2009など）、考古学的なアプローチでは石井浩幸による論考がある（石井2003）。今後は、考古学・歴史学・民俗学・社会学・宗教学といった各分野の見地から、「保存と活用」をも含めた学際的なアプローチのもと、多角的な調査・研究が必要であろう。



※本図は『土地分類基本調査　鶴岡』（山形県企画調整部土地対策課1979）、『三瀬・温海』（山形県企画調整部地域整備課1991）の「地形分類図」を合成・加工した。

第２図　地形分類図



※国土地理院発行２万５千分の１地形図「三瀬」「鶴岡」を使用し、５万分の１で掲載

第３図　遺跡位置図

表１　遺跡位置図の遺跡名と時代

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	出張坂城跡	中世・近世	26	火打崎Ａ・Ｂ遺跡	縄文・奈良・平安	51	藤沢館跡	中世
2	栗館跡	中世・近世	27	西目経塚	中世	52	鍋倉館跡	中世
3	稲荷坂Ｂ遺跡	平安	28	山口Ａ・Ｂ遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	53	岡山Ａ遺跡	縄文・平安
4	玉作３遺跡	平安	29	山口Ｃ須恵器窯跡	奈良・平安	54	岡山Ｂ遺跡	平安
5	玉作２遺跡	奈良・平安・近世	30	水沢遺跡	奈良・平安	55	井岡遺跡	平安・中世
6	玉作１遺跡	古墳・奈良・平安	31	大広Ａ遺跡	縄文	56	井岡城跡	平安・中世
7	興屋川原遺跡	古墳・奈良・平安	32	水沢館跡	中世	57	囲地田遺跡	古墳・奈良・平安
8	行司免遺跡	平安	33	大広菊台遺跡	奈良・平安・中世	58	大道下遺跡	平安
9	木の下館跡	縄文・中世	34	大広Ｂ墳墓	奈良・平安・中世	59	月記遺跡	古墳・平安・中世
10	万治ヶ沢遺跡	縄文・平安	35	中里Ｄ遺跡	奈良・平安	60	大東遺跡	平安
11	岩崎遺跡	古墳・奈良・平安	36	地蔵堂山経塚	平安・中世	61	後田遺跡	古墳・平安・中世
12	南田遺跡	古墳・奈良・平安	37	七日台館跡	中世	62	地ノ内遺跡	平安・中世
13	清水新田遺跡	古墳	38	七日台墳墓群	中世	63	番田遺跡	平安
14	矢馳Ｂ遺跡	古墳	39	田川館跡	中世	64	塔の腰遺跡	平安・中世
15	矢馳Ａ遺跡	古墳・奈良・平安・中世	40	田川蓮華廃寺跡	奈良・平安・中世	65	鳥居上遺跡	平安・中世
16	山田遺跡	古墳・奈良・平安	41	柴田山遺跡	縄文	66	三ヶ水口遺跡	平安・中世
17	助作遺跡	古墳	42	関根Ｃ遺跡	縄文	67	赤坂館跡	中世
18	中野遺跡	古墳・平安	43	関根Ｄ遺跡	旧石器・縄文	68	杉ヶ沢Ａ遺跡	旧石器
19	畑田遺跡	古墳	44	関根Ｆ遺跡	縄文	69	杉ヶ沢Ｃ遺跡	平安
20	上大坪遺跡	古墳・平安	45	関根Ｅ遺跡	縄文	70	杉ヶ沢Ｄ遺跡	縄文
21	八幡田遺跡	平安	46	鉢巻山館跡	中世	71	仏供沢窯跡	平安
22	越中台窯跡	平安	47	隼人山墳墓	中世	72	高坂館跡	中世
23	駒繋遺跡	奈良・平安	48	高野山館跡	中世	73	北内遺跡	平安
24	尾浦城跡	中世	49	かき山館跡	中世	74	金峯Ｂ遺跡	縄文
25	菱津古墳	古墳	50	遊行上人墳墓	中世	75	小杉ヶ沢遺跡	縄文

Ⅲ　調査の成果

1　遺跡の概要

A　歴史的事象

出張坂城跡は、鶴岡市下清水字水尻の丘陵上に所在する中世の平山城であり、近接する山城の栗館とともに別名を「妙味水城（しみず）」或いは「清水城」とも称された。

築城者や築城時期については不明であるが、『古代・中世史料　上巻』（鶴岡市史編纂会2002）所収の「秋田藩家蔵文書」によると、「元亀二年（1571）六月二十八日　大宝寺義氏が岩屋氏に妙味水城の反乱軍鎮圧が近いことを報ずる」（170ｐ）とあり、この記述から16世紀中葉にはすでに築城されていたことがわかる。16世紀は戦国時代を象徴する戦乱の世の中で、各地で武将が天下を争った下剋上の時代であり、庄内地方においてもご多分に洩れず戦乱・下剋上の世であった。なお、同書所収の「庄内古文書影写集」によると、「元亀二年（1571）八月二十七日　大宝寺義氏が土佐林一党と桜井氏の反乱を鎮圧する」（170ｐ）とある。反乱軍とされる土佐林氏と桜井氏は武藤（大宝寺）氏の家臣であり、この反乱（謀叛）鎮圧の際に武藤（大宝寺）義氏によって妙味水城（清水城）は落城した。これにより、妙味水城は武藤氏の属城となったが、天正11年（1583）に武藤義氏は、最上義光と内通していた家臣の前森蔵人らによって尾浦城（大浦城）を攻められ、自害した。

義氏の死後、弟の丸岡兵庫頭義興が武藤家の家督を継いだ。また、義氏を自害に追いやった前森は東禅寺城（亀ヶ崎城）の城主となり、東禅寺筑前守を名乗った。

その後、庄内の地を巡る武藤氏と最上氏との小競り合いが続くが、武藤義興は小国城城主の小国彦次郎を仲介し、上杉氏の家臣であり、越後の本庄城（村上城）城主本庄繁長の二男である千勝丸（義勝）を養子に迎え、越後（上杉氏）との関係を強化した（斎藤・佐藤誠1969）。しかし、市立米沢図書館所蔵の『本庄家譜』によれば、天正15年（1587）に「大宝寺一族東禅寺筑前守兄弟謀叛ヲ企テ義興ニ切腹サセ、千勝丸ヲ討果スベキ催ニ仍テ千勝丸、庄内清水城ニ曳取ル処ニ山形義明共ニ東禅寺兄弟ニ一味シ彼等ノ逆徒此ノ城ヲ囲ム。父繁長ハ此ノ急難ヲ注進、繁長迎トシテ出張千勝丸ハ瀬波ノ城ヘ曳取ル」（15ｐ）とあり、またしても最上義光と内通している東禅寺筑前守（前森蔵人）らの反乱が起きた。そして追い詰められた義興は自害し、庄内地方を約400年に渡り治めていた武藤氏は、天正15年（1587）、歴史の表舞台から消える。また、義興が養子に迎えた千勝丸は清水城（妙味水城）へと逃げるが、最上・東禅寺軍勢に清水城は囲まれる。千勝丸の父である本庄繁長によって千勝丸は救出され、本庄氏の本拠地である「瀬波ノ城」（村上城）へと逃げることとなる。『庄内領郡中名勝旧蹟図絵』によると、清水城は武藤氏の家臣である佐藤備中守とその臣下である大瀧八左エ門が守っていたものの、最上義光の二男である清水大蔵によって落城し、佐藤備中守は戦死した、と書かれている（巻頭写真２）。なお、清水大蔵とは正確には最上義光の三男、清水義親のことであり、大蔵村清水にあった清水城の城主である。ところで、歴史的事象として「清水城」や「清水義親」を取り上げる際は、本遺跡の別称である「清水城」と大蔵村の「清水城」との混同に注意すべきである。

さて、翌天正16年（1588）、本庄繁長・義勝父子は、雪辱を果たすべく、上杉景勝の援助のもとに庄内に攻め入った。庄内地方の戦国合戦で有名な十五里ヶ原の戦である。なお、合戦の地は現在、「十五里ヶ原古戦場」として、県の史跡に指定されている。この戦で、本庄を中心とする上杉勢に、東禅寺を中心とする最上勢は抗戦するも、東禅寺城は落城した。そして本庄氏が入城し、その城主となり、庄内の地は上杉勢の本庄氏が治めることとなった。なお、十五里ヶ原の戦は、庄内最後の戦国合戦で、戦が終わった後、天正17年（1589）には落武者の殲滅作戦が強行され千人余りの残党や老若男女が成敗されるなど、非常に激しいものであり、庄内の覇権をめぐる上杉氏と最上氏の代理戦争とも言われている（鶴岡市史編纂会2011）。

B　遺跡の概要

明治初期に田林禮堂によって描かれた絵巻物の『庄内領郡中名勝旧蹟図絵』には、「清水村出張リ坂ノ圖」として「清水城」に関する由来とともに、平地に飛び出ている丘陵上の地形が描かれている（巻頭写真２）。

現在の出張坂城跡は、昭和33年（1958）の国道７号開削及び昭和44年（1969）の鶴岡鉄工団地の造成により遺跡の大部分について削平を受けてしまい、現存するのは、わずかに遺跡北端部の丘陵及び西側の通称「豆腐山」と呼ばれる平坦な丘陵のみとなってしまった。昭和37年（1962）に国土地理院によって撮影された航空写真（写真図版１）では、国道７号はすでに開通しているものの、鉄工団地が造成される前の地形の様子が見てとれ、『庄内領郡中名勝旧蹟図絵』に描かれた絵と対比させても、それほど大きな違いがないことがわかる。

遺跡周辺は通称「稲荷坂」と呼ばれており、「清水村出張リ坂ノ圖」には朱色の鳥居が並んで立っている状況が描かれている。現在はその名残となる古楯稲荷の社が豆腐山に通じる道路脇にひっそりと建立されているが、小さな祠であり、現地の住民によれば、現在は同じ下清水地区内にある深山神社に合祀され、現在の社も小さな祠になったという。また、昭和31年（1956）９月20日の『荘内日報』によると、国道７号建設工事の際、土砂の掘削中に稲荷坂から完形の須恵器壺が出土し、また、貝の化石も多く出土したという。昭和33年（1958）９月６日の『荘内日報』では、同じ国道７号建設工事の際、同地から多数の人骨が出土したとも書かれている。それら以外に、秋保良によれば、国道開削時に、「須恵系陶器」「墨書土器」「宝篋印塔」が出土したという（秋保1997）。今回の発掘調査では、城館に関する遺構・遺物以外に、過去の記録にある須恵器・石塔・人骨等の出土も考慮に入れ調査を進めたが、確認することはできなかった。

２　調査の方法

A　調査区の設定

本調査では、国道７号鶴岡バイパス建設の事業範囲のうち、現存する遺跡範囲600㎡について発掘調査を行った。調査区として、城館の曲輪と考えられるテラス状の地形４か所を設定し、東側下段をＡ区、上段をＢ区、丘陵の尾根を境にし北側上段をＣ区、下段をＤ区とそれぞれ呼称した。

また、遺跡・遺構の正確な位置を記録するため、世界測地系に基づき、調査範囲内に公共座標杭を業者委託によって３か所設置し、グリッド設定（地区割り）の基準点とした。この公共座標のＸＹ軸を基準に座標計算を行い、調査範囲内に５ｍ四方のグリッドを設定した。各グリッドは、Ｘ軸：－141435.000　Ｙ軸：－92770.000を起点とし、南から北に向かって435、430、425～400と付した算用数字と、西から東に向かって770、765、760～735と付した算用数字の組み合わせによって表示し、410－760グリッドや425－755グリッド等と呼称した。

標高は、丘陵下の地表面で17.4ｍ、丘陵最上部付近の地表面で34.2ｍを測り、比高差は約17ｍとなる。比高差があり調査区も急な斜面に面しており、バックホーやキャリアダンプといった重機や小型機械を使用することができないため、表土の除去はすべて人力によって行った。調査で生じた廃土については、斜面に沿ってプラスチック製波板を半円筒状に丸めて作ったシューターを使用し、土捨て場へと搬出した。

B　記録作業

土層の堆積状況確認や遺構検出のためのトレンチを２本設定し、丘陵の尾根上に設定したトレンチを第１トレンチ、Ａ区の下部からＢ区の上部にかけて丘陵を縦断するように設定したトレンチを第２トレンチとそれぞれ呼称した。

また、遺構の精査については形状や大きさに応じ、土層観察用のベルトの設定もしくは半裁し、写真撮影や実測図の作成を行った。土層の観察には、新版標準土色帖（2008年版）を用いた。写真撮影は調査の進捗に合わせて６×７カメラと35㎜カメラ及びデジタルカメラを使用した。使用フィルムは、６×７判がモノクロームとカラーリバーサルの２種類を、35㎜判はカラーリバーサルを用いた。

遺構の完掘後、調査区の空中写真撮影及び測量を行い、調査区の全体図及び平面図の作成を実施した。

C　基本層序

第１トレンチ及び第２トレンチの壁面を実測・図化（第７～９図）し、基本層序とした。遺跡の層序は、上から腐葉土から成る表土、曲輪を形成した際の盛り土・切り土からなる整地層、凝灰岩ブロックからなる地山の順である。遺構検出面は、曲輪形成の際の盛り土・切り土が検出された面とした。

D　整理作業

現地での発掘調査終了後、発掘器材・出土遺物・実測図等は速やかに当センターに搬入し、遺物の洗浄・注記等の基礎整理作業を行った。その後、遺物の接合･実測･拓本といった諸作業を行った。そして、遺構・遺物の実測図のデジタルトレースを行い、併行して遺物の写真撮影、業務委託によるＳＤ２採取試料の理化学分析（放射性炭素による年代測定）といった各種整理作業を行った。また、本文の執筆作業も同時に行い、本報告書の作成を行った。

3　検出遺構

本調査では、城館を形成した曲輪を想定し、調査前にテラス状の地形として視認できた箇所をＡ～Ｄ区の４区画に分け、調査区を設定した。検出された遺構はＢ区に集中しており、全体的に検出された遺構は極めて少なかった。

Ａ区は建造物等の痕跡は検出されなかったが、平場の下段から幅約１ｍの犬走りと想定される遺構を検出した。

Ｂ区では、集石遺構としてＳＸ１、溝跡としてＳＤ２、ピットを11基検出した。

Ｃ・Ｄ区については全体的に大幅な削平を受けており、遺構は検出されなかった。特にＤ区は、一面に家庭ゴミや農薬のビニール袋といった廃棄物が多数埋設しており、遺跡に伴う地形ではなく、近年に削平されて形成された平場であることが確認された。

A　ＳＢ19掘立柱建物跡（第12図）

掘立柱建物を構成したと考えられるピットが６基確認され、建物をＳＢ19、柱穴をＥＢ３・４・９・14・15・16とした。ＳＢ19はＢ区南側、435・430－750グリッドにまたがる部分に位置する。北西－南東ラインを軸とし、桁間は北西－南東ライン・北東－南西ラインとも２間であり、梁行は北東－南西ラインが１間である。建物の規模は桁行は3.5m、梁行は1.4mを測る。掘り方は、遺構の残存状態が悪いため明瞭なものは少ないが、地山の凝灰岩ブロック層まで掘り込んでいるタイプ（ＥＢ４・９）と、凝灰岩ブロック層の直上で止めているタイプ（ＥＢ３・14・15・16）の２種類に分類できる。

建物の成立年代は、ＥＢ16から17～18世紀代と考えられる唐津産の陶器片（13）が出土していることから、おおむね同時期ととらえられる。

B　ＳＸ１集石遺構（第11図）

Ｂ区西側、430－755・750グリッドにまたがる部分で検出した。調査開始前から一部が表土上に露出しており、何らかの遺構の存在を示唆するものであった。使用された石材は全て川原石であり、南北ラインを底辺とし、西を頂点とする、三辺がそれぞれ約90㎝の正三角形状の集石遺構である。

人為的に配石されているため、当初は何らかの墓である可能性を考慮に入れていたが、遺構を掘り下げ断面を観察したところ、地表下10㎝程度で地山の凝灰岩ブロック層となり、地中に掘り込まれた痕跡は確認されなかった。遺物の出土もなく、遺構が形成された時期及び性格については不明である。

C　ＳＤ２溝跡（第11図）

Ｂ区南半、435・430－750グリッドにまたがる部分で検出した。南東から北西に延び、長さ約３ｍ、幅約60㎝を呈する。遺構検出面からの深さは、場所により起伏があるものの、約40㎝であった。堆積土は、炭化物や焼土を多く含む、しまりのある褐色や黒褐色シルトであった。

出土遺物は、近現代の釘が大量に出土し、その他、和釘、鋏（かすがい）、鑿（のみ）等の建築具（写真図版13）、焼け焦げて炭化した木材や石材、被熱痕のある陶磁器片（14）や寛永通宝（32）、和箪笥の留め金具や用途不明の鉄製品（写真図版13）、環状土製品（30）等がある。特に釘に関しては溝全体から大量に出土した。焼け焦げて炭化した木材

や被熱痕のある遺物、焼土が多いため、溝状の穴を掘り、廃材等を焼却・埋設した跡ではないかと考えられる。特に規格が統一された釘が大量に出土したことから、近現代の遺構であると判断した。

なお、出土した炭化物３点を外部委託し、放射性炭素による年代測定を行った結果、年代はおおよそ18～19世紀代との測定値が出た（詳細は第Ⅳ章参照）。このことからも、ＳＤ２は城が築かれていた時代の遺構ではなく、後世に造られた遺構であることが裏付けられた。

Ｄ　ピ　ッ　ト（第13・14図）

11基のピットのうち、掘立柱建物を構成したと思われるピットが６基で、それ以外のピットは５基（ＳＰ５・６・12・17・18）である。いずれも、Ｂ区から検出されたが、建物跡等を構成することはできなかった。また、残存状態も悪く、掘り方が明瞭なものはなく、遺物の出土もなかったため、ピットが作られた時期や性格については不明である。

4　出土遺物（第15～20図）

出土遺物は、Ａ～Ｄ区及び第２トレンチ、調査区外から出土したが、遺構に伴う遺物はＥＢ16から出土した陶器片一点（13）のみである。同じＢ区の435－750グリッドから出土した陶器片（12）と同一個体であり、17～18世紀代の唐津産陶器と考えられる。

遺構外からは、陶磁器、瓦質土器、須恵器系陶器、銭貨、縄文土器、金属製品等、様々な遺物が出土した。年代は、縄文時代から近現代に埋設されたと思われる釘等の金属製品まで多種多様であり、本遺跡及び遺跡周辺において縄文時代から現代まで人々の生活があったことが窺える。ただし、出土遺物全般に小破片であり、器形が復元できるものは非常に少なく、残存状態も不良のものが多い。そのため、型式・産地等が特定できるものは少なかった。

１は縄文土器である。摩耗が激しく、器種や型式等は不明であるが、縄文時代の集落等が本遺跡が所在する丘陵付近にあった可能性がある。２～４は土師器である。１同様、摩耗が激しく、器種や型式等は不明である。５の須恵器系陶器は15世紀前半の珠洲産と思われるが、出土したのは小破片だったこともあり、型式を判断するには至らなかった。６・７は瓦質土器である。いずれも小破片であり判断が難しいが、形状から鉢の可能性がある。８～28は陶磁器である。多くが小破片であり、器種が復元できるものは極めて少ない。８は磁器である。内面に施釉がないため、花瓶もしくは香炉である可能性が高い。９・10・17・18・22は肥前系の磁器である。器種はいずれも碗である。年代は近世以降と考えられる。11は陶器である。内面に施釉はなく、器種は瓶類である。14は被熱痕のある中国産の青磁である。遺構には伴わないものの、ＳＤ２内から出土したことから、廃材等を焼却した際に焼けたものと考えられる。15・16は同一個体の陶器である。外面の施釉が特徴的で、サメ肌状の様相を呈したマダラ模様の施釉がされている。内面に施釉がないことから、水差しの可能性が考えられる。19は磁器である。小破片であるため判断が難しいが、白磁である可能性がある。器種は皿としておく。20・21は同一個体で器種は香炉である。内面に施釉はほとんどなく、わずかに一部に施釉が見られる程度である。23は陶器であり、内面に施釉はなく、外面は一面に黒の鉄釉が施されている。器種は小破片のため不明であるが、鉢か香炉の可能性を指摘しておく。24～26は同一個体の陶器の擂鉢である。年代は近世としておく。29・30は不明土製品であり、形状から「環状土製品」としておく。30は遺構に伴うものではないが、ＳＤ２内から出土しており、被熱による煤が付着しており、黒く焼け焦げている。同様の土製品が周辺の古墳時代の遺跡から出土しているが、30はＳＤ２から出土しているため、近現代の遺物である可能性もある。31～34は銭貨であり、銭銘は「寛永通宝」である。近世の所産である。32については被熱による煤が付着している。ＳＤ２での焼却の際に被熱したものと思われる。

表２　遺物観察表

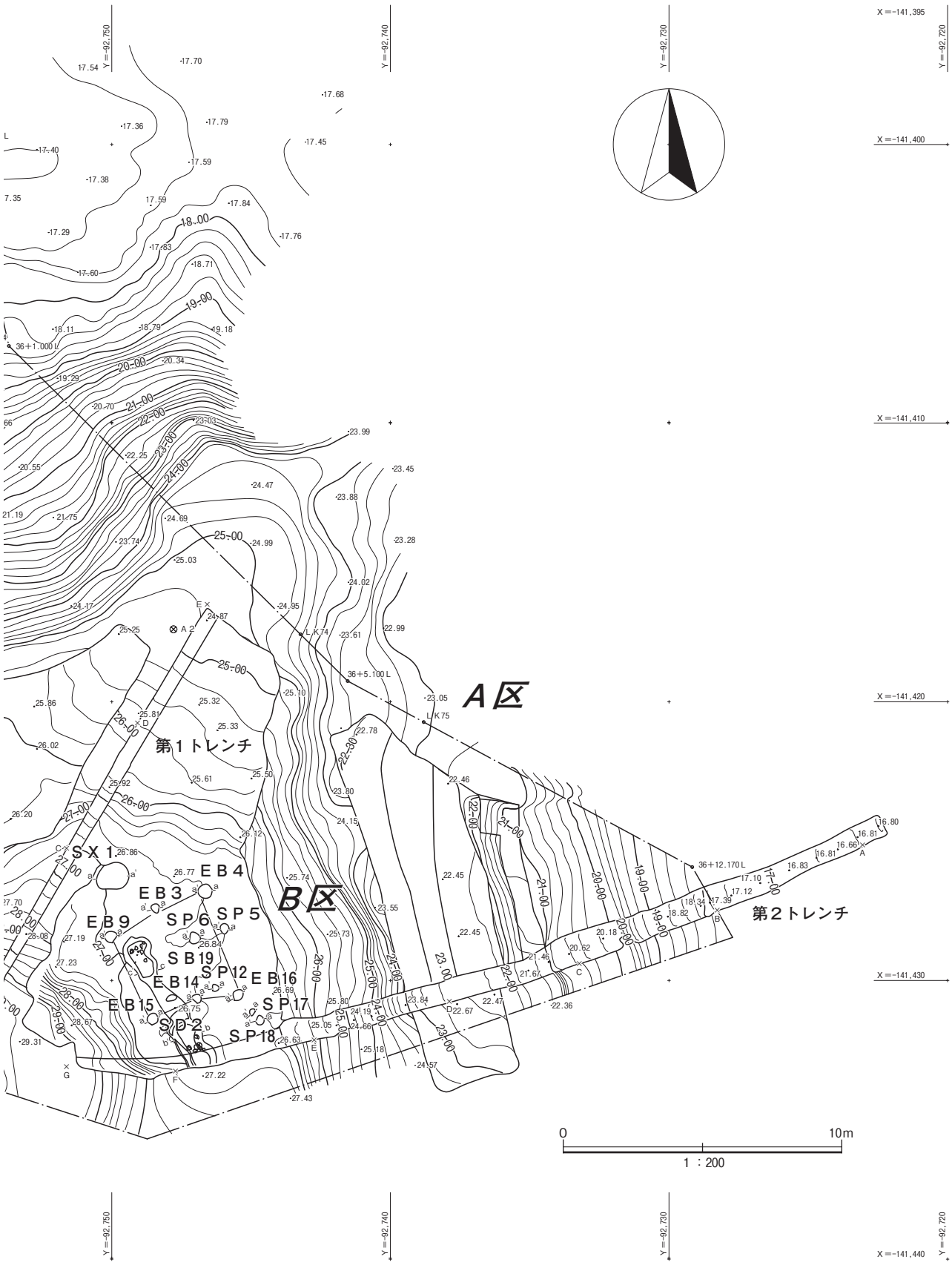
※単位は㎜。（　）は推定値、〈　〉は残存値を表す。

No.	種別	器種	地区	出土位置	登録番号	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	計測値 器厚	備考
1	縄文土器		C	425－760					6	
2	土師器		A	430－740　１層					6	
3	土師器	甕か	A	Ｘ－Ｏ					5	
4	土師器	甕か	B	ＳＤ２　430－750					11	底部
5	須恵器系陶器	擂鉢	２Ｔ	下段	ＲＰ１				13	15Ｃ前半　珠洲
6	瓦質土器	鉢か	A	425－745					8	中世
7	瓦質土器	火鉢か	A	425－740　１層				＜35＞	9	中世
8	磁器	花瓶もしくは香炉か	２Ｔ	下段　Ｘ－Ｏ				＜49＞	5	内面施釉なし　肥前系
9	磁器	碗	２Ｔ	下段　Ｘ－Ｏ				＜18＞	8	肥前系
10	磁器	碗か	A	430－740　２層					5	肥前系
11	陶器	瓶	A	430－740　２層				＜11＞	5	内面施釉なし　ロクロ目あり
12	陶器	碗	B	435－750　２層				＜20＞	5.5	17～18Ｃ代　唐津　13と同一個体
13	陶器	碗	B	ＥＢ16				＜24＞	5	17～18Ｃ代　唐津　12と同一個体
14	磁器	碗	B	ＳＤ２　433－750					7	15～16Ｃ　中国産青磁　被熱痕あり
15	陶器	水差しか	B	430－750　１層				＜29＞	4	内面施釉なし　ロクロ目あり 16と同一個体
16	陶器	水差しか	B	ＳＤ２　435－750 ２層					2.5	内面施釉なし　ロクロ目あり 15と同一個体
17	磁器	碗	A	430－740					12	肥前系
18	磁器	碗	A	430－740				＜23＞	4	肥前系
19	磁器	皿	B	425－750　１層				＜23＞	4	15Ｃ　白磁・八角形か
20	陶器	香炉	２Ｔ	下段　Ｘ－Ｏ				＜20＞	13	内面施釉なし　21と同一個体
21	陶器	香炉	２Ｔ	下段　Ｘ－Ｏ					7	内面の一部に施釉あり 20と同一個体
22	磁器	碗	D	Ｘ－Ｏ					5	19Ｃ　肥前系
23	陶器	鉢か	A	425－740　１層					6	外面鉄釉　内面施釉なし
24	陶器	擂鉢	B	ＳＤ２　435－750 ２層				＜140＞	13	近世　25,26と同一個体
25	陶器	擂鉢	B	ＳＤ２　430－750 １層					11	近世　24,26と同一個体
26	陶器	擂鉢	B	Ｘ－Ｏ					11	近世　24,25と同一個体
27	陶器	皿	調査区外	Ｘ－Ｏ		(146)	(80)	30	5	近現代
28	陶器	碗	調査区外	Ｘ－Ｏ			40	55	6	近現代
29	土製品	不明土製品	A	Ｘ－Ｏ		26(外径)	10.5(内径)		8	環状土製品
30	土製品	不明土製品	B	ＳＤ２　430－750 底部		27.5(外径)	11(内径)		14	環状土製品　被熱による焦げ目あり
31	銭貨		A	430－740　１層		23			1	「寛永通宝」
32	銭貨		B	430－750　１層		23			1	「寛永通宝」 被熱による煤付着
33	銭貨		B	430－750　１層		23			1	「寛永通宝」
34	銭貨		B	430－750　１層		23			1	「寛永通宝」

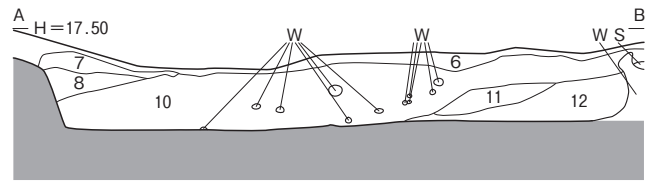
第４図　出張坂城跡縄張図

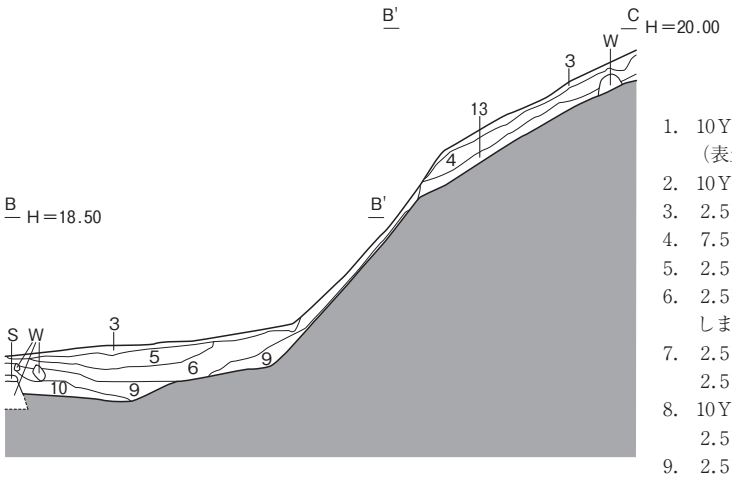
Y＝-92,780
Y＝-92,770
Y＝-92,760
D区
C区
L K73
L K72
L K71
L K70
L K69
G329
G330
G331
G332
G333
G334
G335
G336
G337
G338
A 1
A 3
36＋3.400
35＋5.900
35＋00
34＋5.800
17.00
18.00
19.00
20.00
21.00
22.00
23.00
24.00
25.00
26.00
27.00
28.00
29.00
30.00
31.00
32.00
33.00

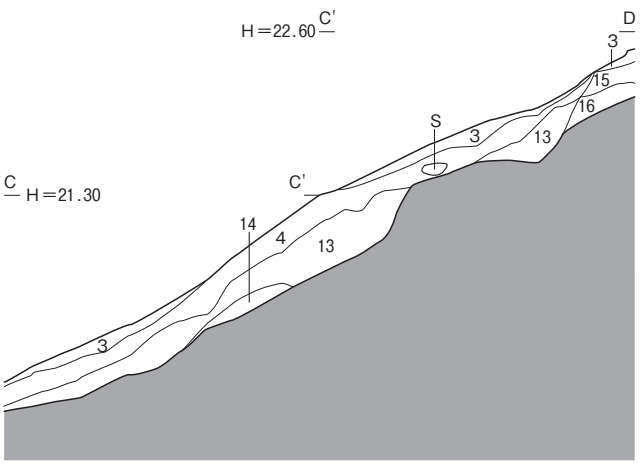
第５図　遺構配置図（１）


A区
B区
第１トレンチ
第２トレンチ
SX 1
EB 3
EB 4
EB 9
SP 5
SP 6
SB 19
SP 12
EB 14
EB 16
EB 15
SP 17
SD 2
SP 18
0
10m
1 ：200

第６図　遺構配置図（２）



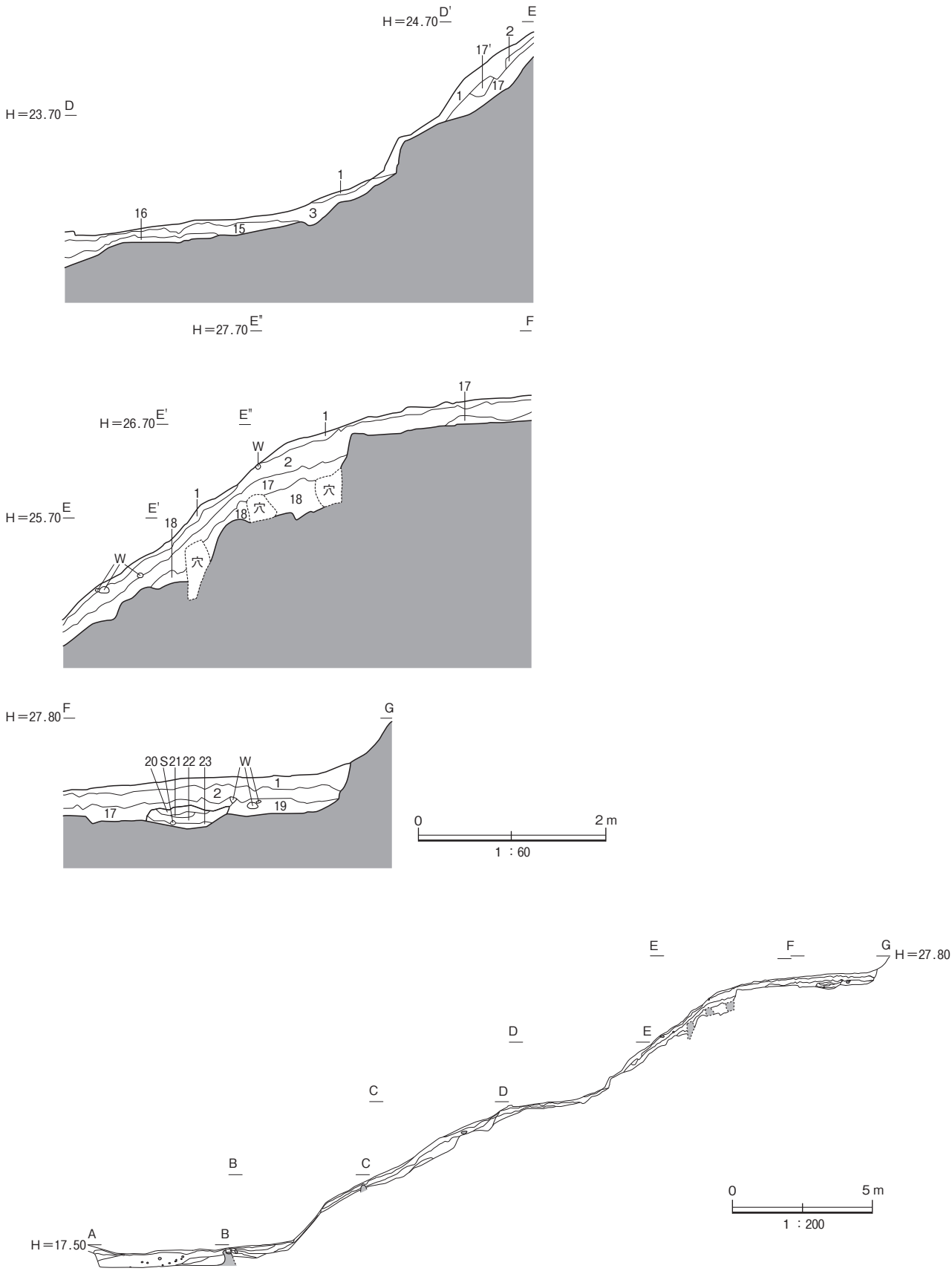




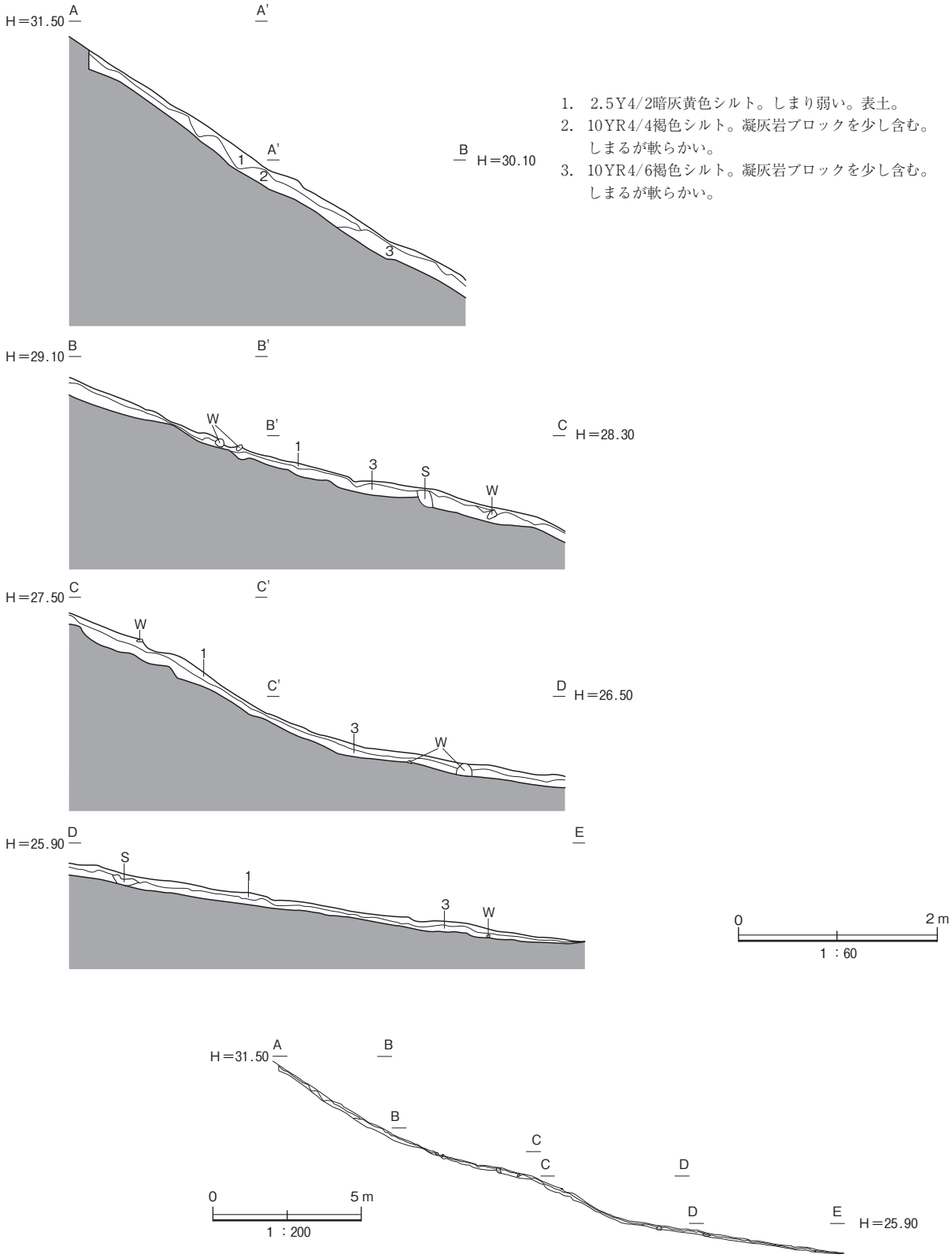
1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。
（表土）しまり弱く軟らかい。
2. 10YR4/6褐色シルト。固くしまる。
3. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト。固くしまる。
4. 7.5YR3/4暗褐色シルト。固くしまる。
5. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト。しまる。
6. 2.5Y3/1黒褐色シルト。
しまり無く軟らかい。白色砂を全体的に多く含む。
7. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト。しまり弱く粘性強い。
2.5Y5/6黄褐色粘土ブロックを少量含む。
8. 10YR4/2灰黄褐色シルト。しまる。
2.5Y4/2暗灰黄色シルトを上部に帯状に含む。
9. 2.5Y5/6黄褐色粘質シルト。粘性強くしまる。
10. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。しまる。
凝灰岩ブロックを全体的に多く含む。
11. 10YR5/6黄褐色シルト。しまる。
凝灰岩ブロックを全体的に多く含む。
12. 10YR3/3暗褐色粘質シルト。粘性強い。しまる。
13. 10YR3/4暗褐色シルト。粘性あり。
14. 10YR4/4褐色シルト。固くしまる。
15. 10YR3/2黒褐色シルト。しまり弱いが固い。
16. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。しまり弱いが固い。
17. 10YR4/4褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
17'. 10YR5/6黄褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
18. 10YR4/6褐色シルト。しまり弱い。
19. 7.5YR4/3褐色シルト。固くしまる。
20. 5 YR5/6明赤褐色シルト。焼土。粘性あり。
21. 10YR3/1黒褐色シルト。粘性あり軟らかい。
22. 7.5YR4/4褐色シルト。固くしまる。粘性あり。
23. 10YR4/6褐色シルト。固くしまる。
※20～23はＳＤ２

0　2m
1：60

第７図　第２トレンチ土層断面図（１）

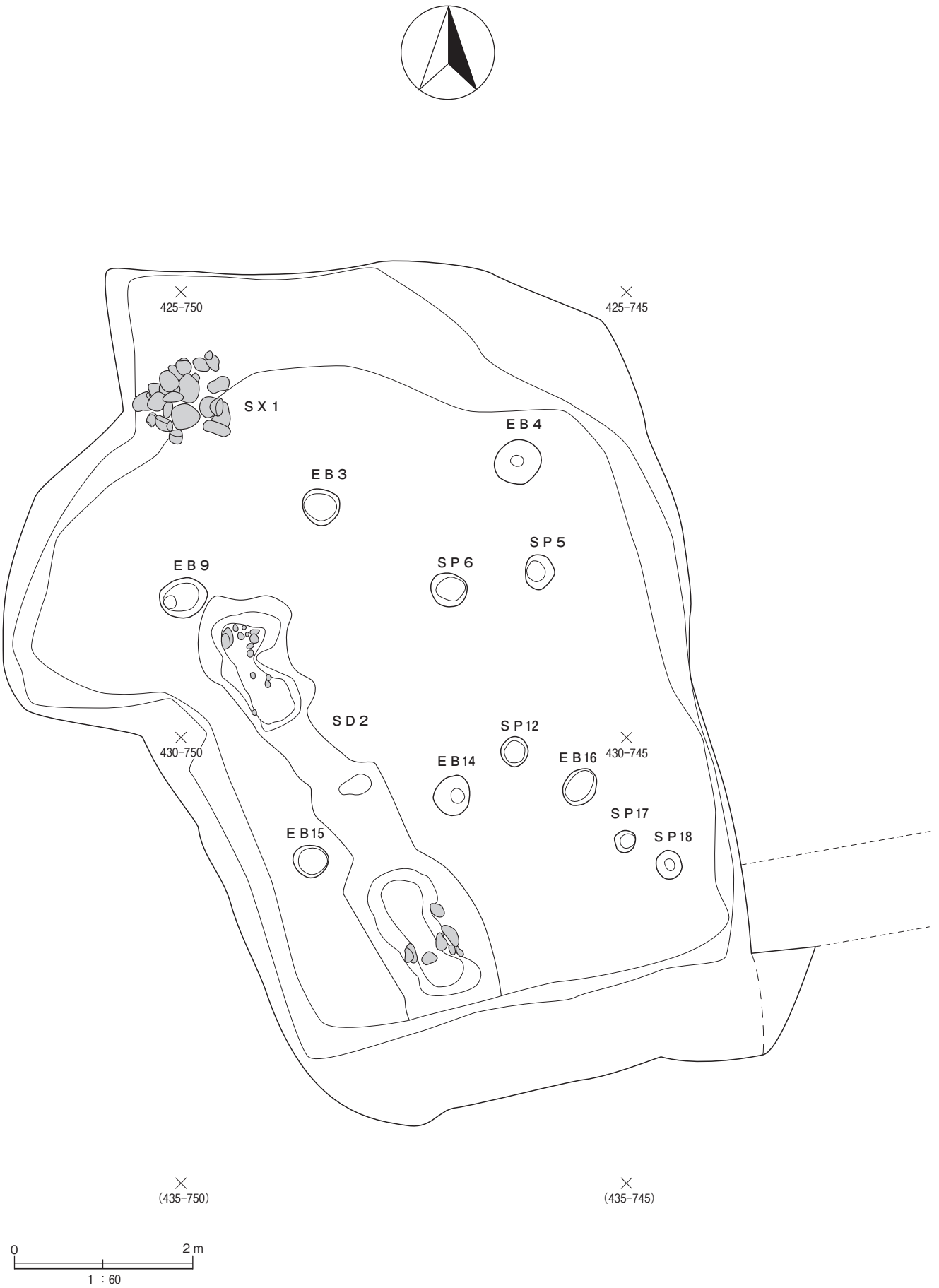


第８図　第２トレンチ土層断面図（２）

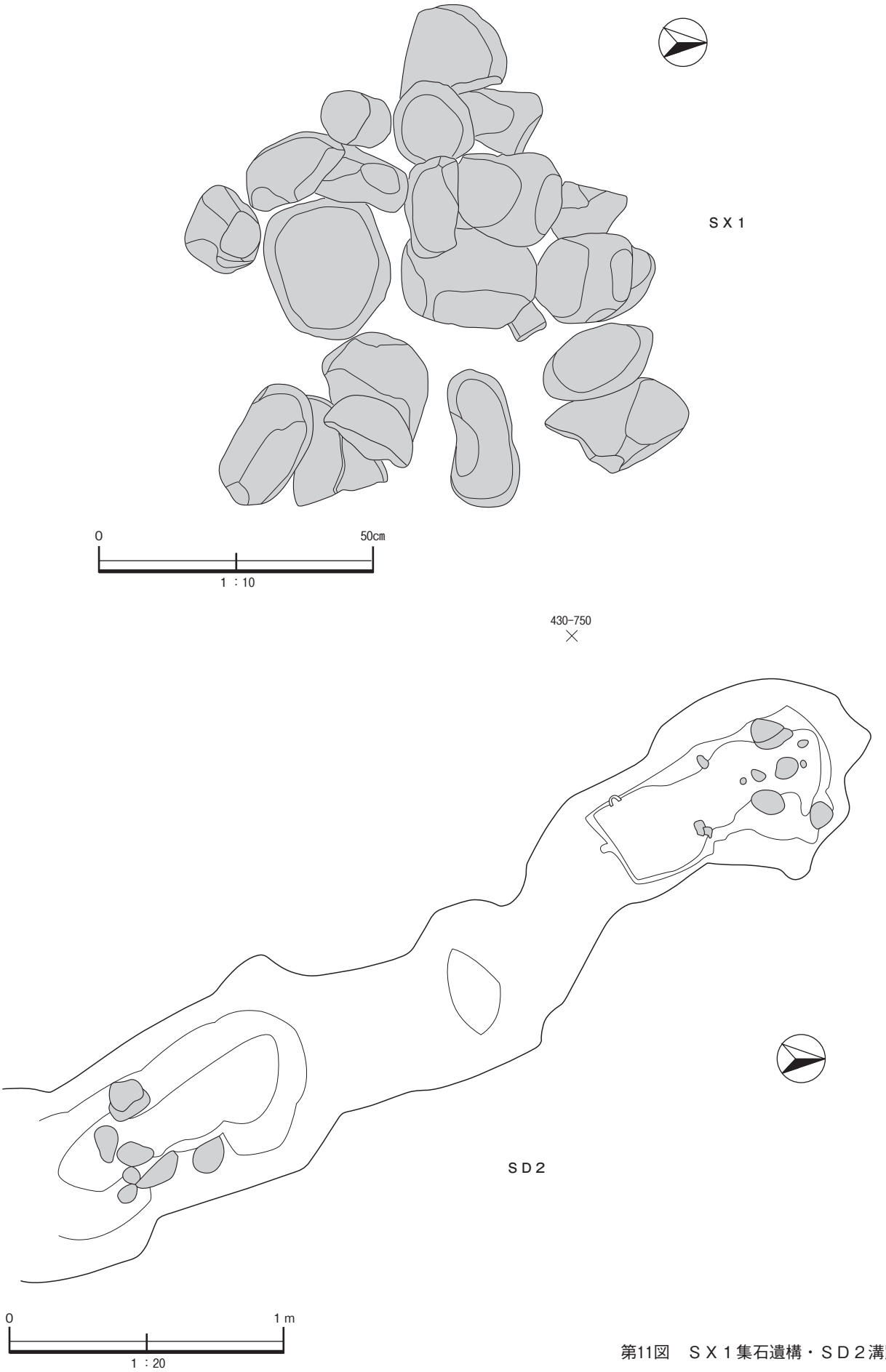


1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト。しまり弱い。表土。
2. 10YR4/4褐色シルト。凝灰岩ブロックを少し含む。しまるが軟らかい。
3. 10YR4/6褐色シルト。凝灰岩ブロックを少し含む。しまるが軟らかい。

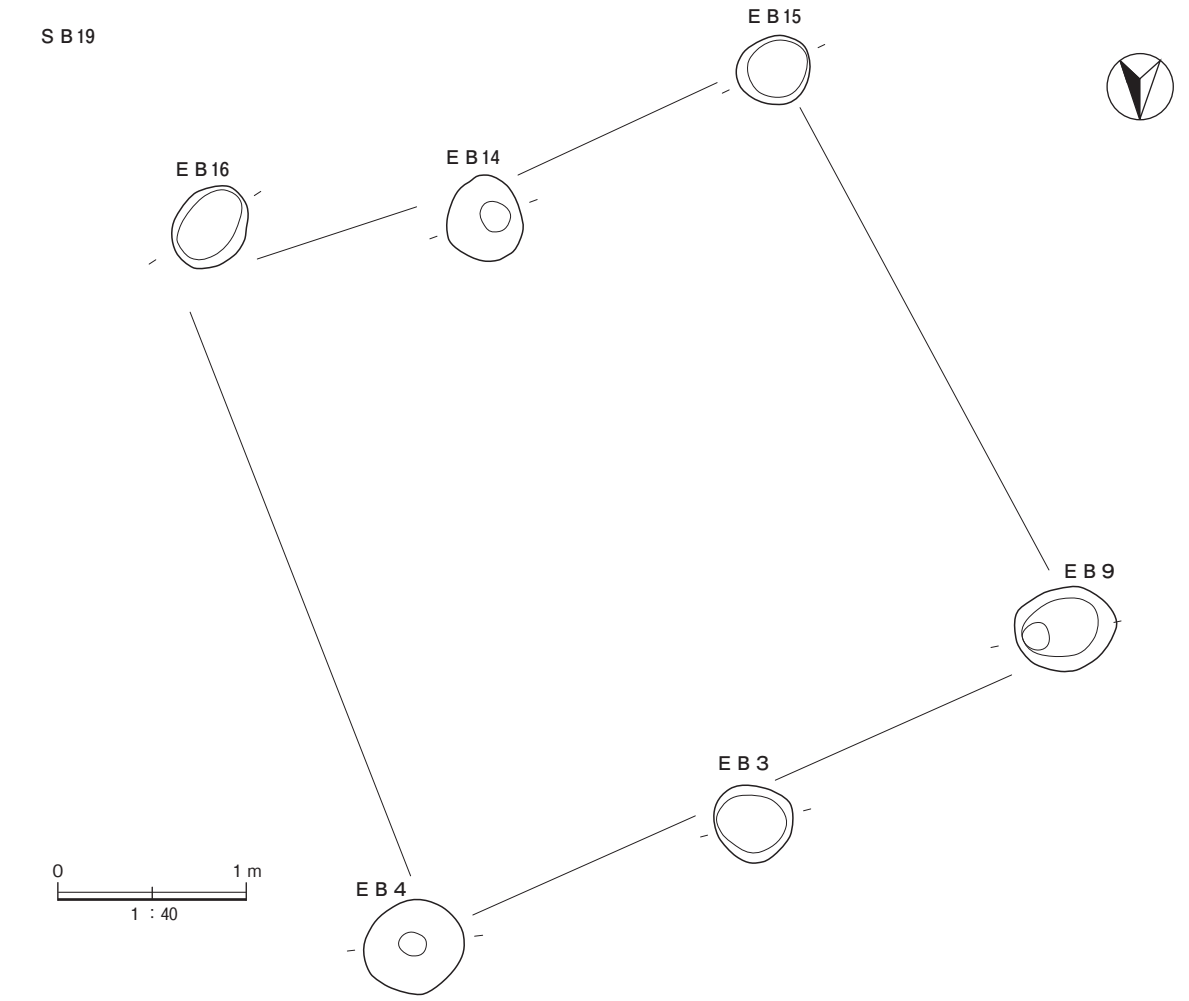
第９図　第１トレンチ土層断面図

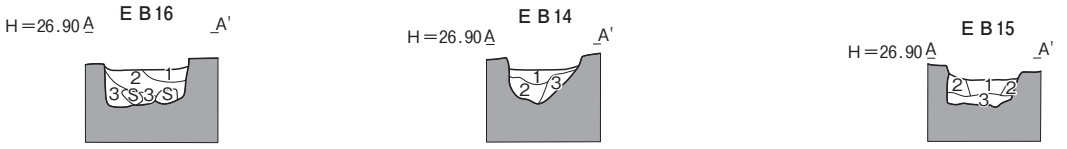


第10図　Ｂ区遺構配置図



第11図　ＳＸ１集石遺構・ＳＤ２溝跡

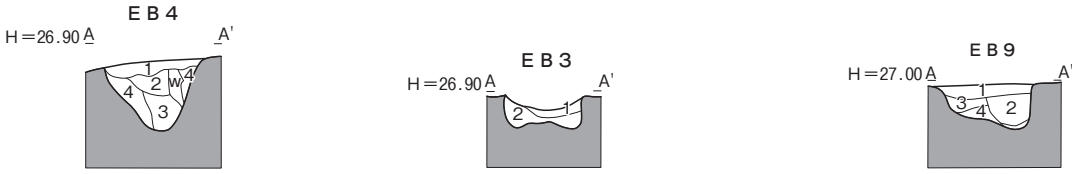




ＥＢ16
1. 10YR4/6褐色シルト。しまる。
2. 10YR4/4褐色シルト。粘性強くしまる。
3. 7.5YR5/6明褐色シルト。しまる。

ＥＢ14
1. 10YR4/4褐色シルト。
凝灰岩ブロックを少し含む。しまる。
2. 7.5YR4/4褐色シルト。
凝灰岩ブロックを少し含む。粘性強くしまる。
3. 7.5YR5/6明褐色シルト。粘性強くしまる。

ＥＢ15
1. 10YR5/6黄褐色シルト。しまる。
2. 10YR4/4褐色シルト。しまる。
3. 7.5YR5/8明褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。

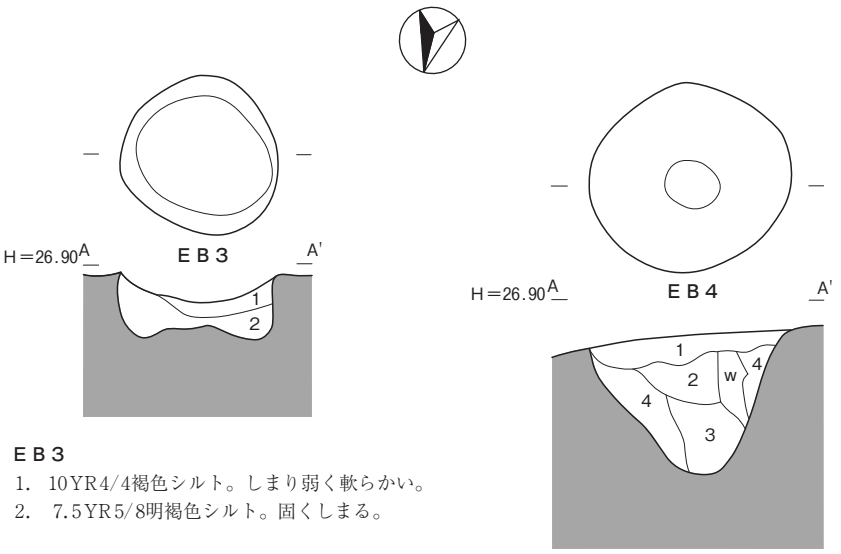


ＥＢ４
1. 10YR4/4褐色シルト。固くしまる。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。
3. 10YR5/6黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。
4. 10YR5/8黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。

ＥＢ３
1. 10YR4/4褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
2. 7.5YR5/8明褐色シルト。固くしまる。

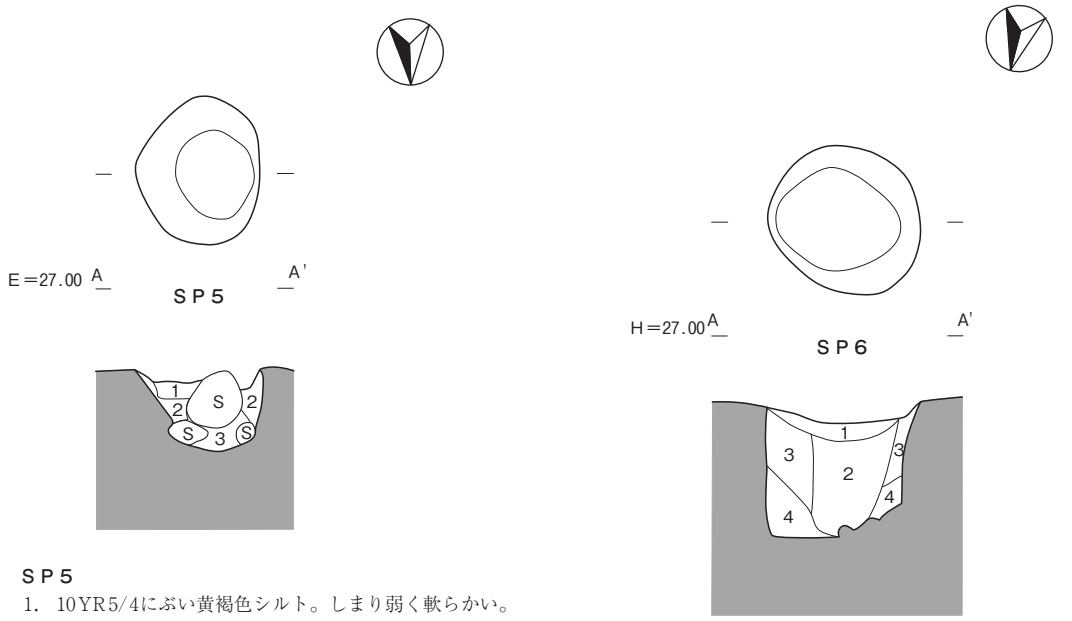
ＥＢ９
1. 10YR4/4褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
2. 10YR4/6褐色シルト。しまる。
3. 10YR3/4暗褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
4. 10YR5/6黄褐色シルト。しまる。

第12図　ＳＢ19掘立柱建物跡



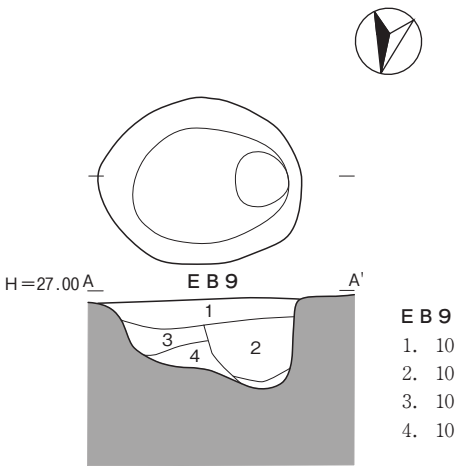
ＥＢ３
1. 10YR4/4褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
2. 7.5YR5/8明褐色シルト。固くしまる。

ＥＢ４
1. 10YR4/4褐色シルト。固くしまる。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。
3. 10YR5/6黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。
4. 10YR5/8黄褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。固くしまる。



ＳＰ５
1. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
2. 10YR4/6褐色シルト。凝灰岩ブロックを多く含む。
しまり弱く軟らかい。
3. 凝灰岩層（地山）

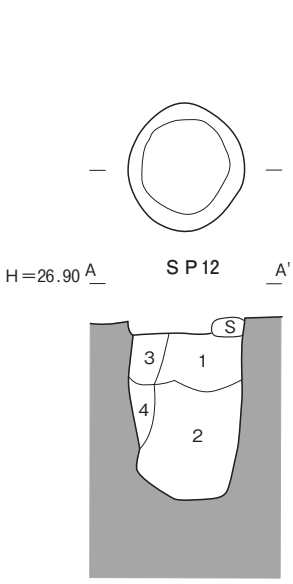
ＳＰ６
1. 10YR4/4褐色シルト。凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。
2. 10YR3/3暗褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
3. 10YR4/6褐色シルト。凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。
4. 10YR3/3暗褐色シルト。しまるが軟らかい。



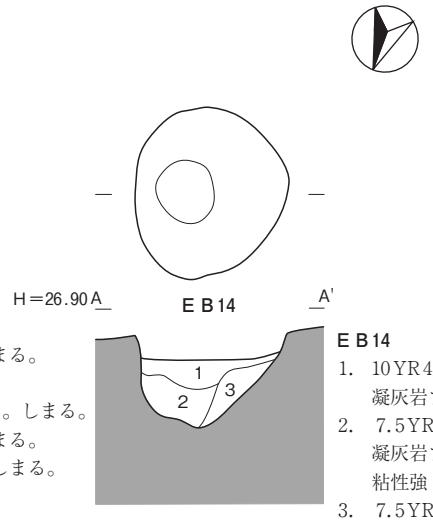
ＥＢ９
1. 10YR4/4褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
2. 10YR4/6褐色シルト。しまる。
3. 10YR3/4暗褐色シルト。しまり弱く軟らかい。
4. 10YR5/6黄褐色シルト。しまる。

0　1 m
1：20

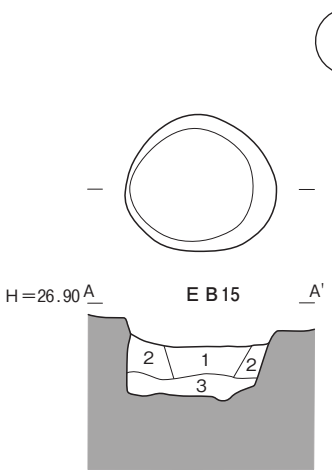
第13図　ＥＢ３・４・９、ＳＰ５・６ピット



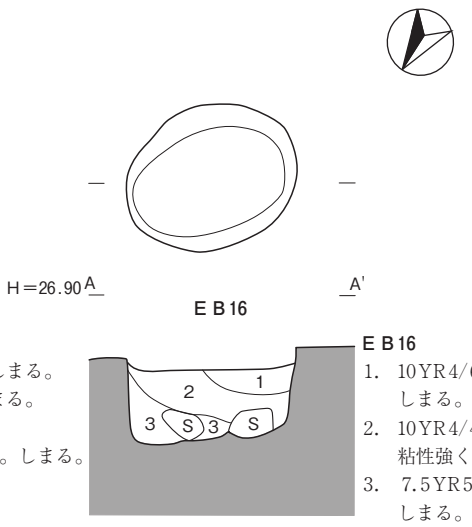
SP12
1. 10YR4/4褐色シルト。しまる。
2. 10YR3/3暗褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。
3. 10YR4/6褐色シルト。しまる。
4. 10YR3/4暗褐色シルト。しまる。



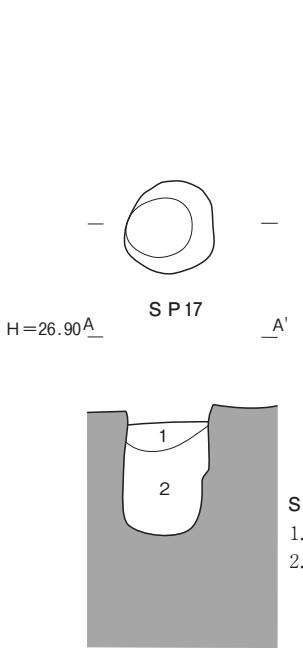
EB14
1. 10YR4/4褐色シルト。
凝灰岩ブロックを少し含む。しまる。
2. 7.5YR4/4褐色シルト。
凝灰岩ブロックを少し含む。
粘性強くしまる。
3. 7.5YR5/6明褐色シルト。
粘性強くしまる。



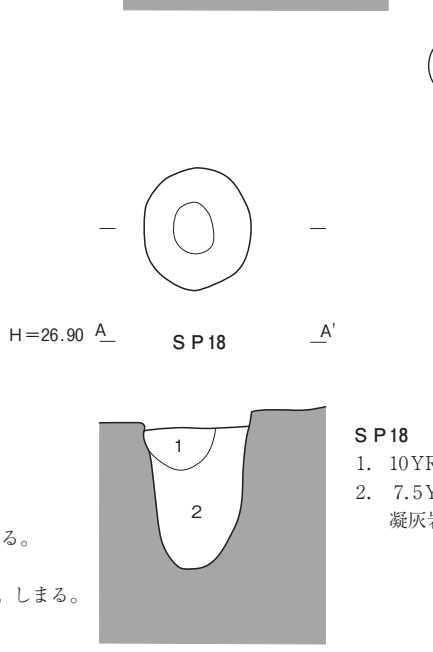
EB15
1. 10YR5/6黄褐色シルト。しまる。
2. 10YR4/4褐色シルト。しまる。
3. 7.5YR5/8明褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。



EB16
1. 10YR4/6褐色シルト。
しまる。
2. 10YR4/4褐色シルト。
粘性強くしまる。
3. 7.5YR5/6明褐色シルト。
しまる。



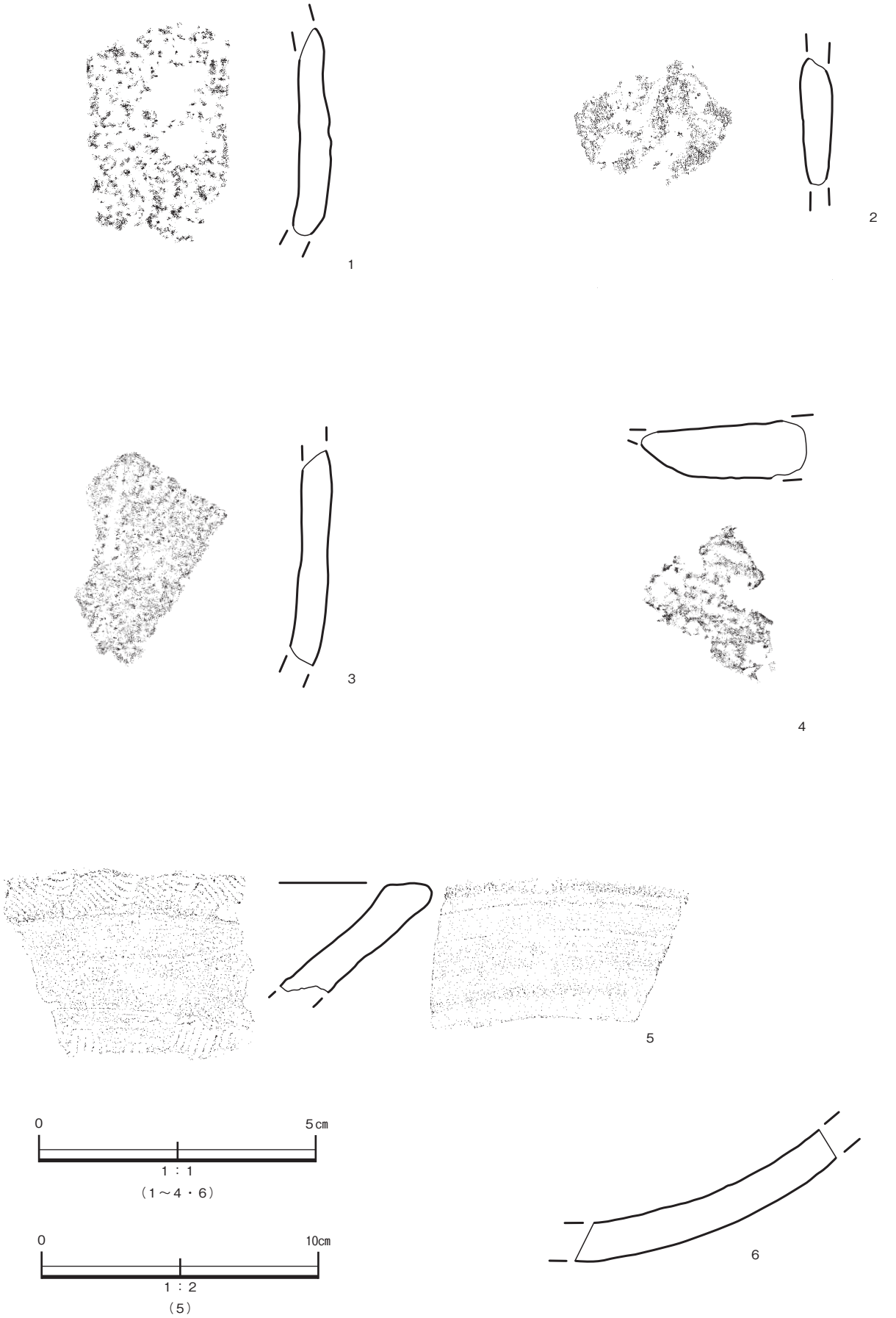
SP17
1. 10YR4/4褐色シルト。しまる。
2. 7.5YR4/6褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。



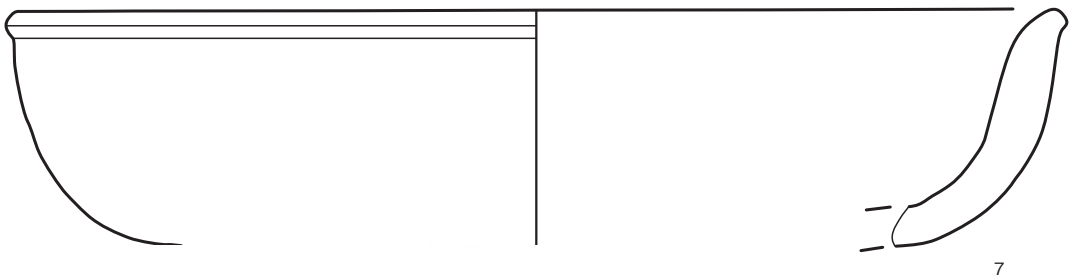
SP18
1. 10YR4/4褐色シルト。しまる。
2. 7.5YR4/6褐色シルト。
凝灰岩ブロックを多く含む。しまる。

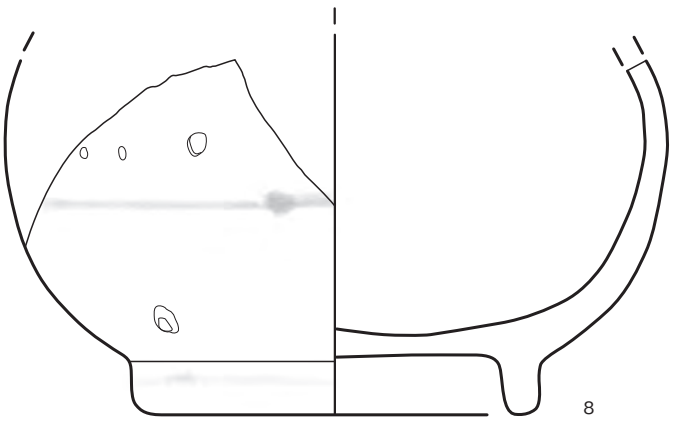
0　1 m
1：20

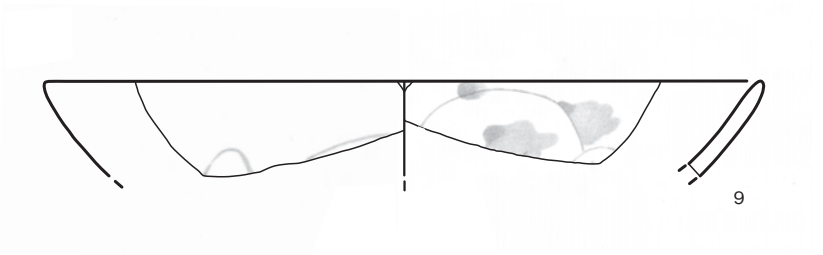
第14図　ＥＢ14・15・16、ＳＰ12・17・18ピット

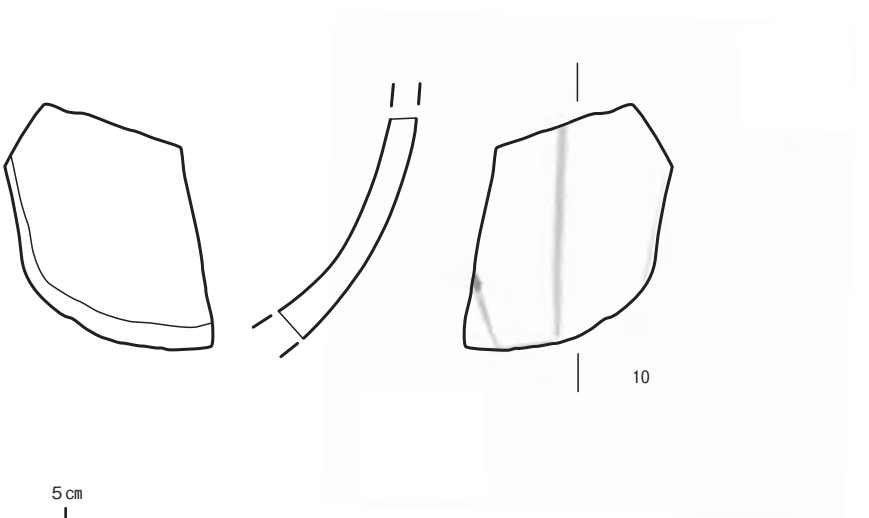


第15図　縄文土器・土師器・須恵器系陶器・瓦質土器

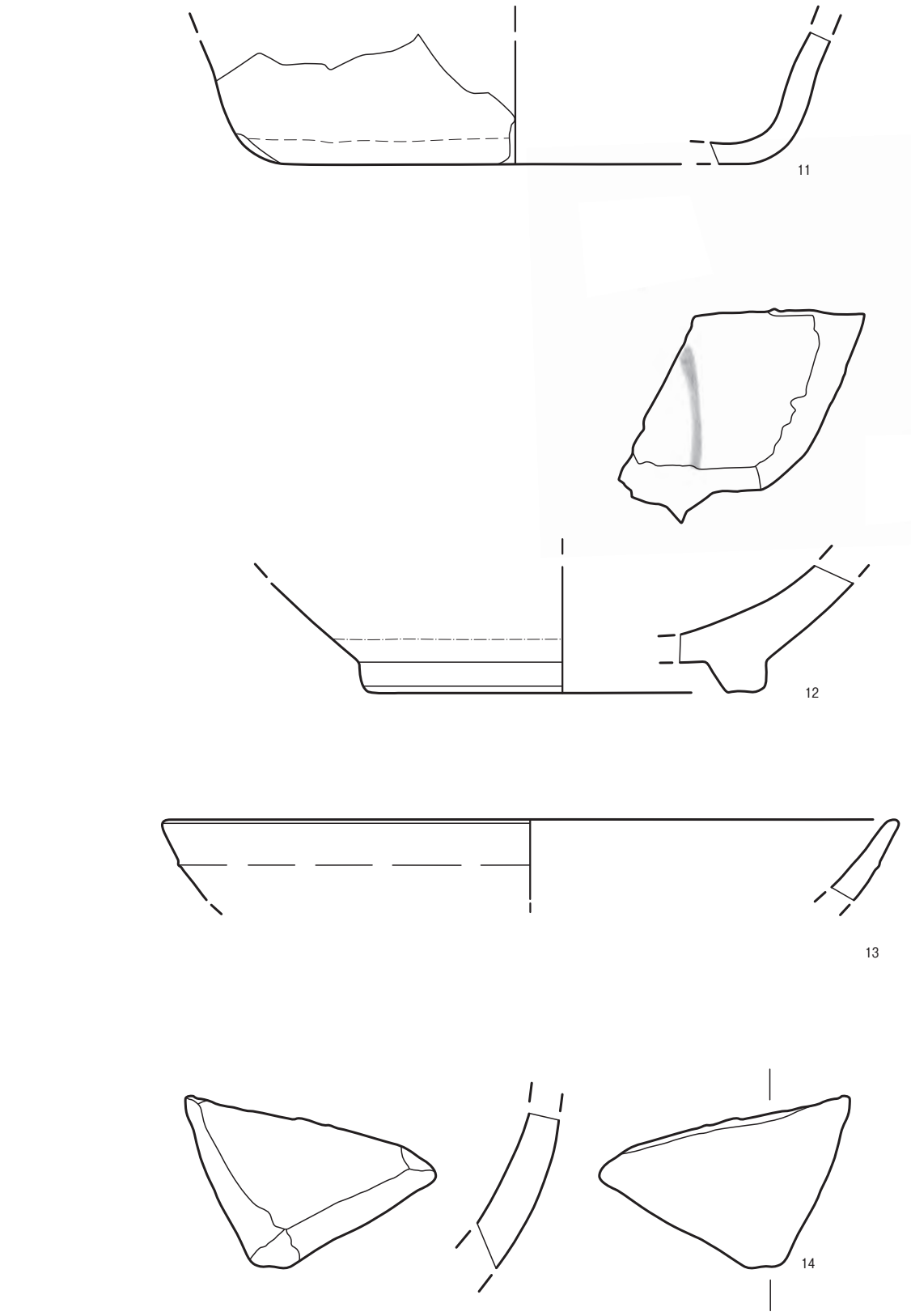




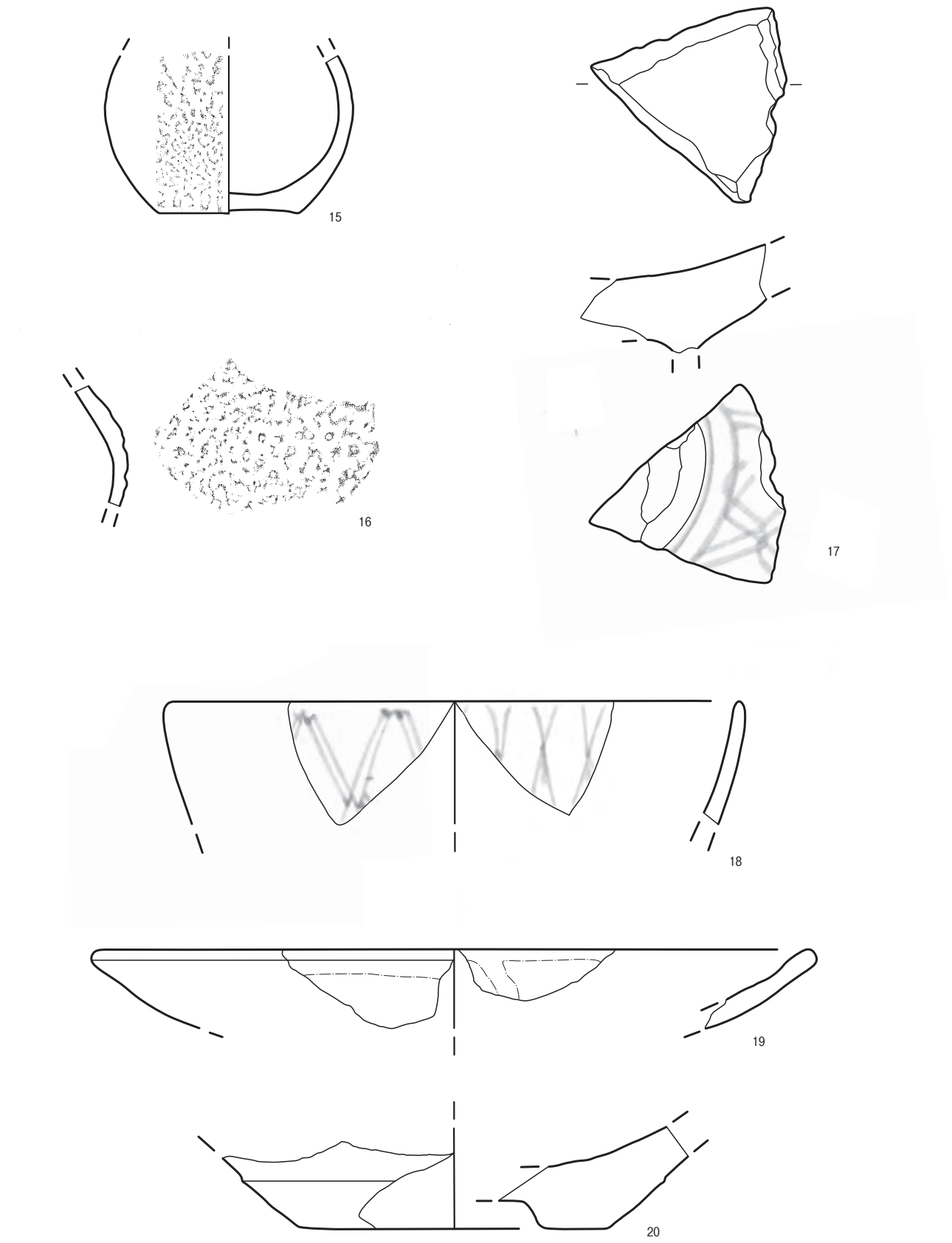




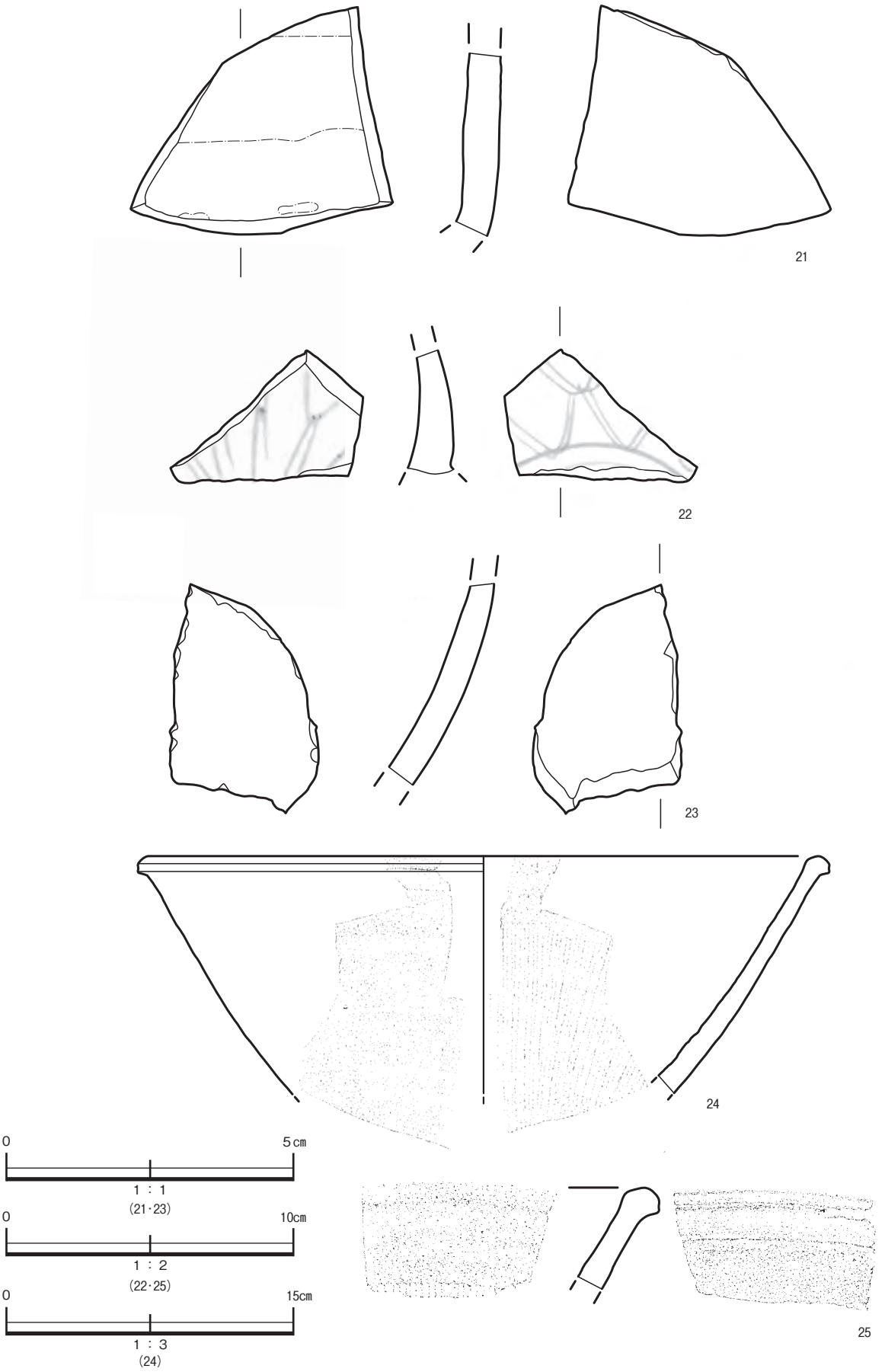
第16図　瓦質土器・陶磁器



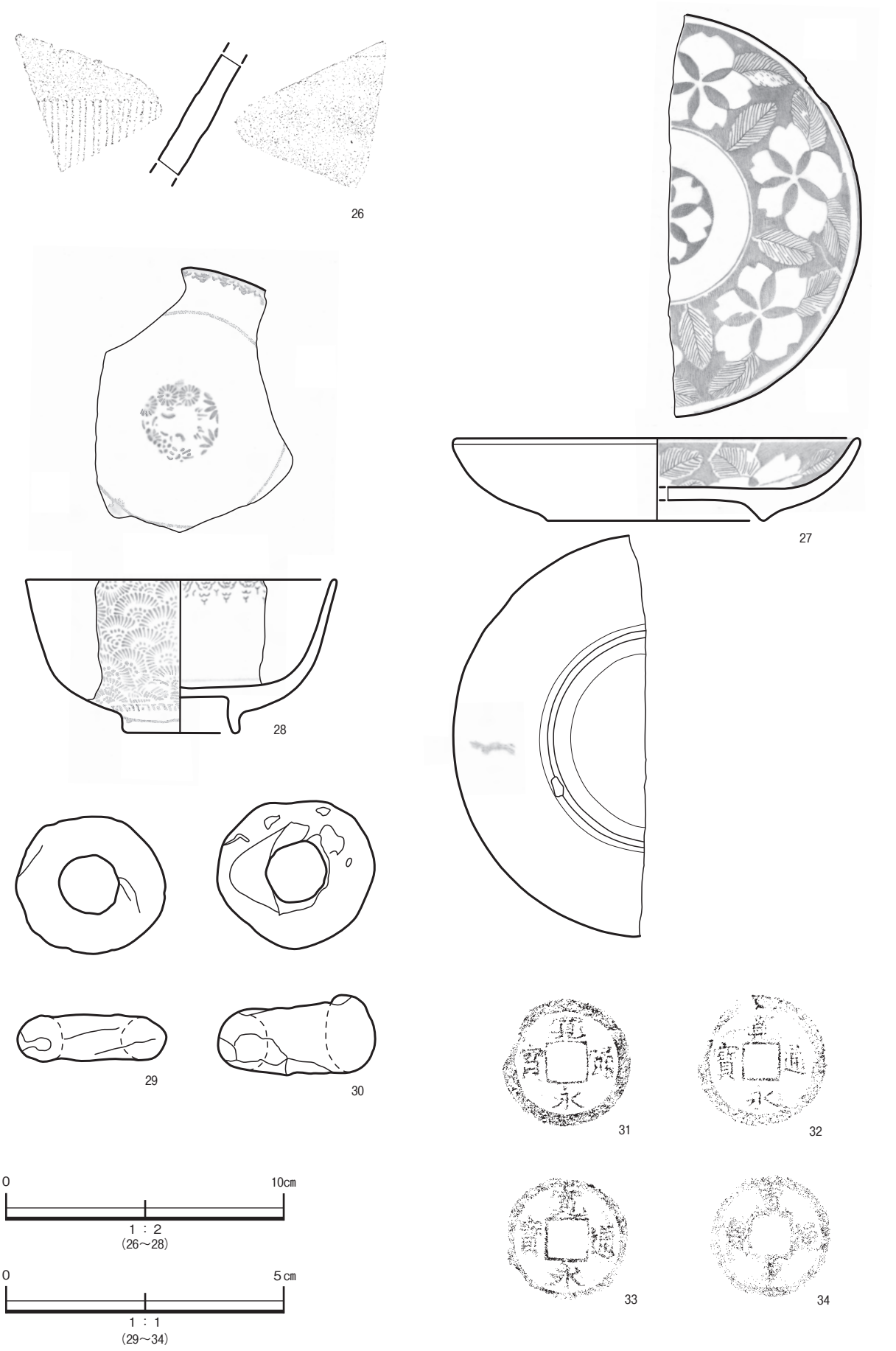
第17図　陶磁器



第18図　陶磁器



第19図　陶磁器



第20図　陶磁器・土製品・銭貨

Ⅳ　理化学分析

1　放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

（株）加速器分析研究所

A　測定対象試料

測定対象試料は、ＳＤ２下層出土炭化物（試料１：IAAA－110519、試料３：IAAA－110521）、中層出土炭化物（試料２:IAAA－110520）の合計３点である（表３）。

B　測定の意義

遺構の成立時期と出張坂城との関連を明らかにする。

C　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１Ｍ）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Ｍまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Ｍに達した時には「AAA」、１Ｍ未満の場合は「AaA」と表３に記載する。
（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（Ｃ）を生成させる。
（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D　測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}Ｃ－AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Ｃの計数、^{13}Ｃ濃度（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）、^{14}Ｃ濃度（^{14}Ｃ/^{12}Ｃ）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算出方法

（１）δ^{13}Ｃは、試料炭素の^{13}Ｃ濃度（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表３）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
（２）^{14}Ｃ年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}Ｃ濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}Ｃ年代はδ^{13}Ｃによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表３に、補正していない値を参考値として表４に示した。^{14}Ｃ年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}Ｃ年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}Ｃ年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}Ｃ濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Ｃが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Ｃの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Ｃによって補正する必要があるため、補正した値を表３に、補正していない値を参考値として表４に示した。
（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}Ｃ濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}Ｃ濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}Ｃ年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}Ｃ年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}Ｃ補正を行い、下１桁を丸めない^{14}Ｃ年代値である。なお、較正曲線及び較正プログ

ラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表４に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

F　測定結果

ＳＤ２出土炭化物の^{14}C年代は、下層出土の試料１が130±20yrBP、試料３が150±20yrBP、中層出土の試料２が90±20yrBPである。下層から出土した試料１と３の値は誤差（±１σ）の範囲でよく一致し、中層出土の試料２もおおむねこれらに近い年代値となっている。暦年較正年代（１σ）は、試料１が1683～1930cal AD、試料２が1697～1917cal AD、試料３が1676～1941cal ADの間に各々複数の範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), pp.355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), pp.337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), pp.1111-1150

表３　分析試料

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-110519	試料１	ＳＤ２　下層	炭化物	AAA	−22.57 ± 0.3	130 ± 20	98.42 ± 0.25
IAAA-110520	試料２	ＳＤ２　中層	炭化物	AAA	−25.56 ± 0.46	90 ± 20	98.87 ± 0.27
IAAA-110521	試料３	ＳＤ２　下層	炭化物	AAA	−26.49 ± 0.34	150 ± 20	98.11 ± 0.26

［＃4464］

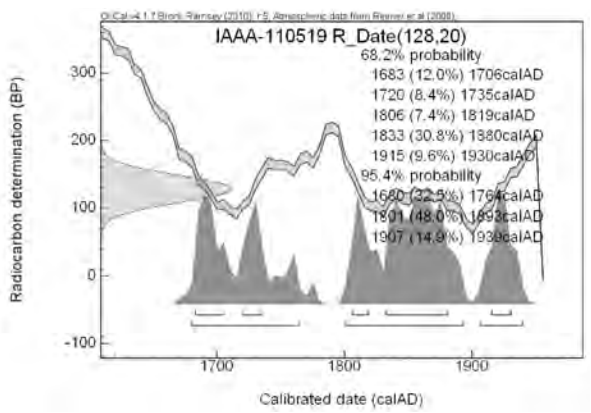
表４　測定結果（１）

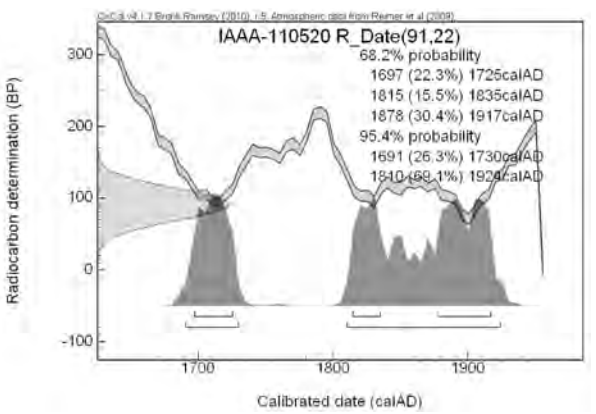
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-110519	90 ± 20	98.91 ± 0.24	128 ± 20	1683calAD - 1706calAD（12.0%） 1720calAD - 1735calAD（ 8.4%） 1806calAD - 1819calAD（ 7.4%） 1833calAD - 1880calAD（30.8%） 1915calAD - 1930calAD（ 9.6%）	1680calAD - 1764calAD（32.5%） 1801calAD - 1893calAD（48.0%） 1907calAD - 1939calAD（14.9%）
IAAA-110520	100 ± 20	98.75 ± 0.25	91 ± 22	1697calAD - 1725calAD（22.3%） 1815calAD - 1835calAD（15.5%） 1878calAD - 1917calAD（30.4%）	1691calAD - 1730calAD（26.3%） 1810calAD - 1924calAD（69.1%）

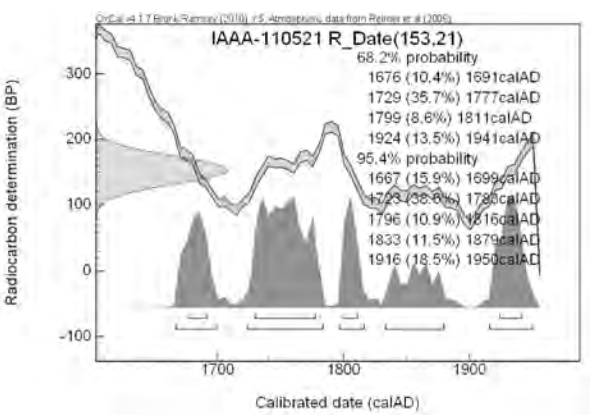
表４　測定結果（２）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-110521	180 ± 20	97.81 ± 0.25	153 ± 21	1676calAD - 1691calAD（10.4%） 1729calAD - 1777calAD（35.7%） 1799calAD - 1811calAD（ 8.6%） 1924calAD - 1941calAD（13.5%）	1667calAD - 1699calAD（15.9%） 1723calAD - 1783calAD（38.6%） 1796calAD - 1816calAD（10.9%） 1833calAD - 1879calAD（11.5%） 1916calAD - 1950calAD（18.5%）

［参考値］







第21図　暦年較正年代グラフ

Ⅴ　調査のまとめ

今回の調査は、国道７号鶴岡バイパス拡幅工事に伴う、出張坂城跡の発掘調査である。調査によって得られた成果を以下に述べる。

出張坂城跡は、山形県鶴岡市下清水字水尻に所在し、ＪＲ羽越本線の羽前水沢駅から東へ約３㎞の地点に位置する。大山川と湯尻川に挟まれた標高30～50m、比高15～35mの丘陵上にある。

出張坂城は、築城者や築城時期は不明ながら、南西側に隣接する山城・栗館とともに「妙味水（しみず）城」或いは「清水城」とも称され、歴史書の記述から、16世紀中葉にはすでに築城されていたことがわかる。

しかし、この出張坂城は、昭和33年（1958）の国道７号の開削及び、昭和44年（1969）の鶴岡鉄工団地の造成により遺跡の大半が削平を受け、現存するのはわずかに遺跡北端部の丘陵及び西側の通称「豆腐山」と呼ばれる平坦な丘陵のみとなってしまった。

今回その残った遺跡北端部が国道７号の拡幅工事により掘削を受けるということで、道路工事に係る600㎡について、発掘調査を実施することになった。

本調査では、城館を形成した曲輪や層序を調べるために、調査区の中央部分と東側斜面にかけて、２本のトレンチを設置した。また調査前にテラス状の地形として視認できた４か所をＡ～Ｄ区と設定し、遺構検出を行った。

Ａ区からは建物跡や土坑などの遺構は検出されなかったが、平場の少し下段の箇所から、城を取り巻く曲輪の１つと考えられる幅１ｍ程の犬走りと想定される遺構を検出した。

Ｂ区からは集石遺構ＳＸ１と溝跡ＳＤ２、柱穴を11基検出した。それらのうち掘立柱建物を構成したと考えられるピットが６基あり、建物をＳＢ19、柱穴をＥＢ３・４・９・14・15・16とした。ＥＢ16から17～18世紀代と考えられる唐津産の陶器片が出土したことから、この建物も同時期に成立していたのではないかと考えられる。大きさが２×２間とそれほど大きくないこと、城の主廓から距離があり、端の部分に位置することから、物見台的な役割を果たしたか、作業小屋的な施設ではなかったかと想定される。集石遺構ＳＸ１は掘り込んだ痕跡がなく、出土遺物もなかったことから、人為的に川原石を持ち込んで配列したが、その時期や性格については不明である。溝跡ＳＤ２からは、大量の焼土や炭化物が出土した。また、和釘や鋏（かすがい）、鑿（のみ）などの建築具や大量の近現代の釘、被熱痕のある陶磁器片や寛永通宝も伴なって出土した。焼け焦げて炭化した木材や被熱痕のある遺物、焼土が多いため、溝状の穴を掘り廃材を焼却・埋設した跡ではないかと考えられる。出土した炭化物を放射性炭素年代測定を行った結果、18～19世紀という分析結果を得た。このことから、ＳＤ２は城が成立していた時代の遺構ではなく、後世に造られた遺構であることが裏付けられた。

Ｃ・Ｄ区については全体的に大幅な削平を受けており、遺構は検出されなかった。このことは、昭和の後半には調査区の平場にあたる場所で畑作による芋の栽培等を行っていたという元地権者の話しからも裏付けられるものである。

調査区の東端に設置した第２トレンチ最下段の地表下50㎝の箇所から、城の成立時期と合致する15～16世紀代の須恵器系陶器の擂鉢片が出土した。また周辺にシダ類など湿地性の植生があることと地形的な観点から見て、最下段の周辺に外堀的な遺構の存在が考えられた。そのため第２トレンチの最下段にあたる平場を調査区ぎりぎりまで３～４ｍ程延長し掘り下げてみたが、外堀に該当するような遺構は検出されなかった。

出土した遺物としては、縄文土器の破片から始まり、土師器や瓦質土器、銭貨や近現代の陶磁器片まで時代としては幅広いが、いずれも持ち込まれたか流れ込んだものではないかと考えられる。

今回の調査区は、中世の城が成立していた時期には城全体の端にあたり、連絡路や物見台的な役割を果たしていたのではないかと考えられる。近現代に至っては、旧国道から上り易い箇所にあり、周辺の住民にとっても畑作を行ったり、物を焼いたり埋設したりと生活に身近な場所だったと考えられる。

引用・参考文献

北村純太郎　1956 『大泉村史』 西田川郡大泉村
斎藤正一・佐藤誠朗　1969 『大山町史』 大山町史刊行委員会
戸川安章　1973 『日本の民俗　山形』 第一法規出版
本庄憲一　1973 『本庄家譜』
千田嘉博・小島道裕・前川要　1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社
石井浩幸　2003 「『モリの山』信仰の研究（１）－山形県内の事例と諸相－」『さあべい』第20号　pp.190－208
吉岡康暢　1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号　pp.1－22
佐藤禎宏　1982 「山形県の中世陶器について」『庄内考古学』第18号　pp.33－54
川崎利夫　1982 「山形県の中世陶器概要」『庄内考古学』第18号　pp.89－91
秋保良　1997 「出張坂城（妙味水城）」『山形県中世城館遺跡調査報告書』第３集　p.74　山形県教育委員会
鈴木岩弓　2009 「モリ供養とは何か」『庄内のモリ供養の習俗』調査報告書　pp.137－143　山形県教育委員会
渋谷孝雄　2009 「山形の旧石器」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』 pp.17－61　日本考古学協会2009年度山形大会実行委員会
植松暁彦・佐藤智幸　2011 「山形県の古代生業」『一般社団法人日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』 pp.640－661　日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会
『荘内日報』 1956.9.20・1958.9.6
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会10周年記念－』
鶴岡市史編纂会　1978 『筆濃餘理』 鶴岡市史資料編　荘内史料集３
鶴岡市史編纂会　2002 『古代・中世史料　上巻』 鶴岡市史資料編　荘内史料集１－１
鶴岡市史編纂会　2011 『図説　鶴岡のあゆみ』 鶴岡市
鶴岡市教育委員会　2003 『山田遺跡発掘調査報告書（Ｉ～Ｋ・Ｍ１区)』 山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第21集
鶴岡市教育委員会　2004 『山田遺跡発掘調査報告書（Ｌ・Ｍ区)』 山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第24集
山形県教育委員会　1987 『生石２遺跡発掘調査報告書（３)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
山形県教育委員会　2009 『庄内のモリ供養の習俗』 調査報告書　山形県教育委員会
山形県教育委員会　2010 『分布調査報告書（36)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第212集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2004 『西向遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第130集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2009 『南田遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第173集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2009 『亀ヶ崎城跡第４・５次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第180集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2010 『興屋川原遺跡第１～４次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第187集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2010 『南口Ａ遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第191集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2010 『玉作２遺跡第２次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第192集

写 真 図 版

出張坂城跡　空中写真（昭和37年）

調査区全景（北から）

A区・B区平場近景（北東から）

A区平場検出状況（西から）

A区平場完掘状況（西から）

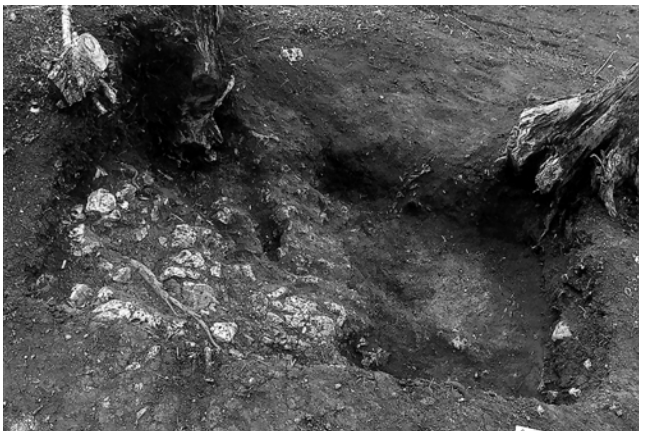
B区平場検出状況（北から）

B区平場完掘状況（北西から）

Ｃ区平場完掘状況（南から）

Ｄ区平場完掘状況（東から）

ＳＸ１検出状況（東から）



ＳＸ１完掘状況（南東から）

ＳＤ２検出状況（南から）

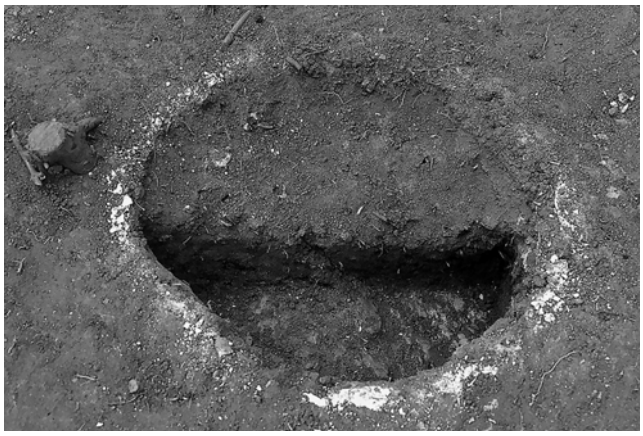
ＳＤ２土層断面（南西から）

ＳＤ２東側検出部完掘状況（北東から）

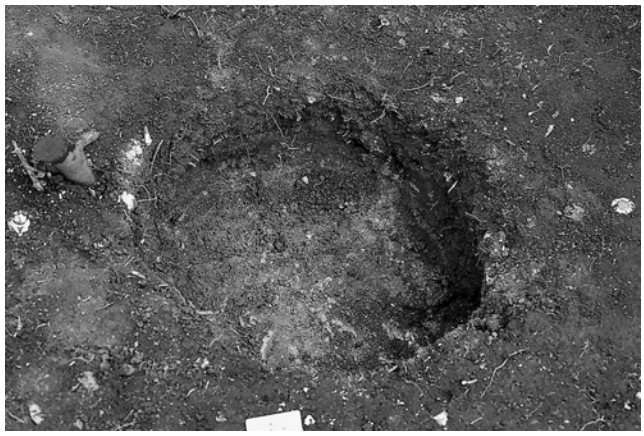
ＳＤ２西側検出部完掘状況（北から）

ＲＰ１出土状況（北東から）

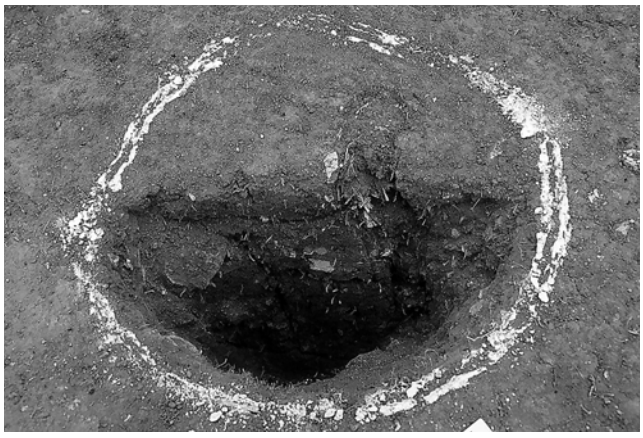
ＳＤ２精査状況



ＥＢ３土層断面（西から）



ＥＢ３完掘状況（西から）

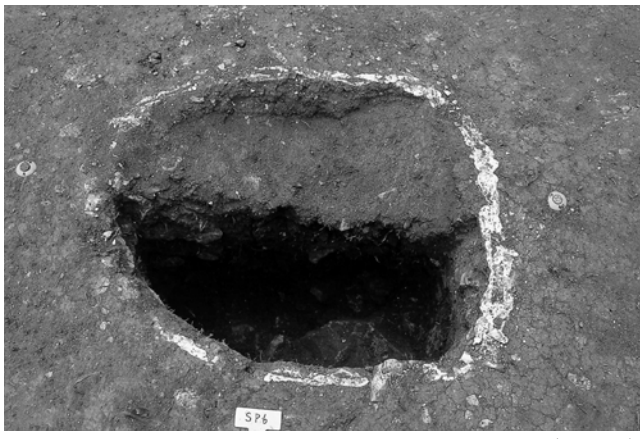


ＥＢ４土層断面（西から）

ＥＢ４完掘状況（西から）

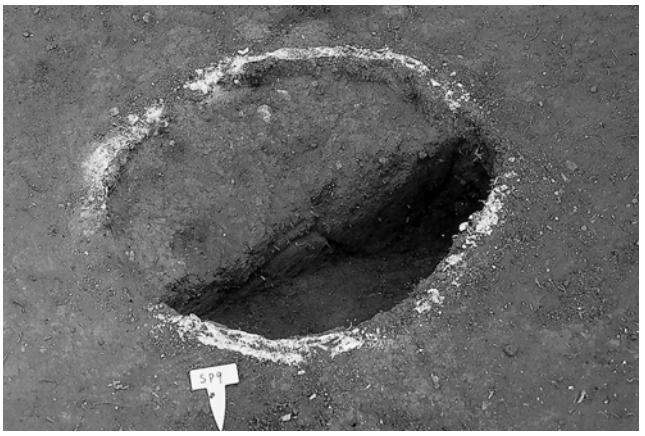
ＳＰ５土層断面（西から）

ＳＰ５完掘状況（西から）

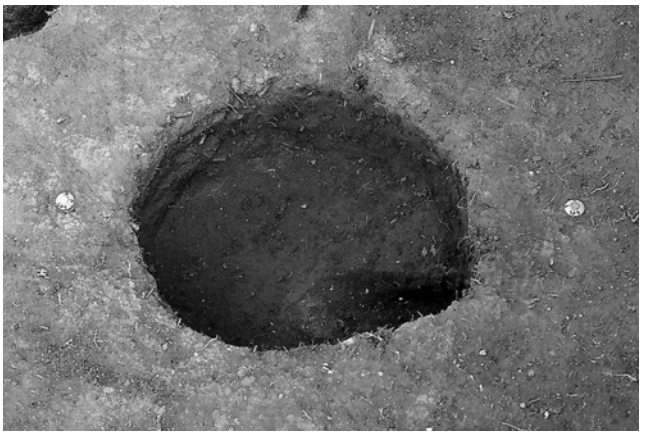


ＳＰ６土層断面（西から）

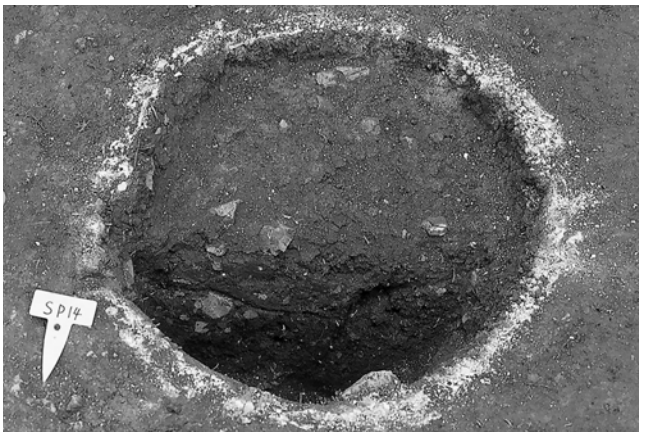
ＳＰ６完掘状況（西から）



ＥＢ９土層断面



ＥＢ９完掘状況

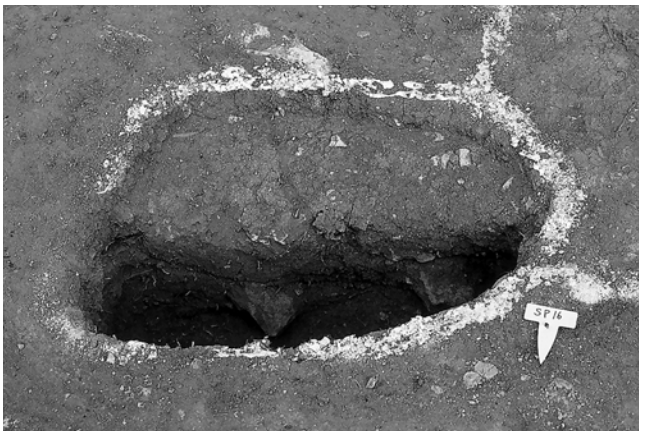


ＥＢ14土層断面

ＥＢ14完掘状況

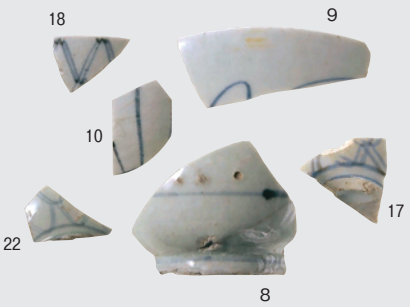
ＥＢ15土層断面

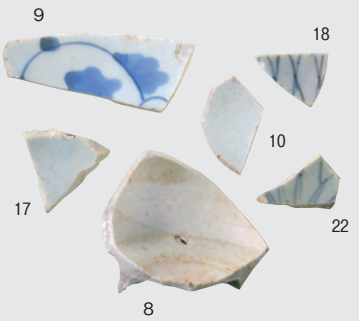
ＥＢ15完掘状況



ＥＢ16土層断面

ＥＢ16完掘状況





縄文土器・土師器・須恵器系陶器・瓦質土器・陶磁器

11

11

13

12

13

12

14

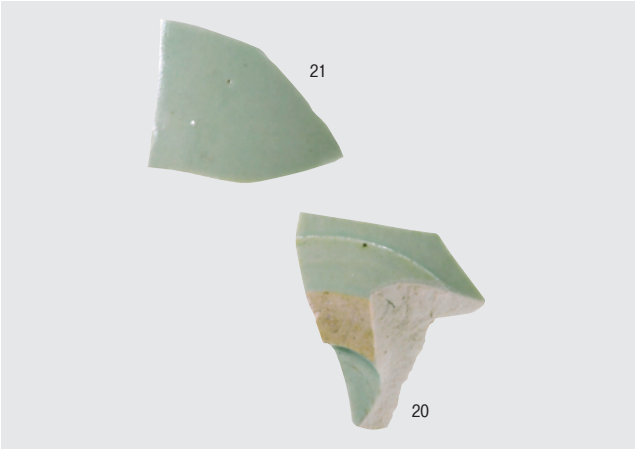
19

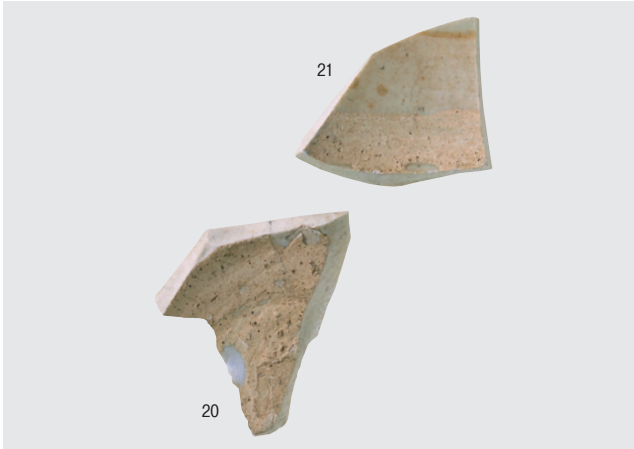
16

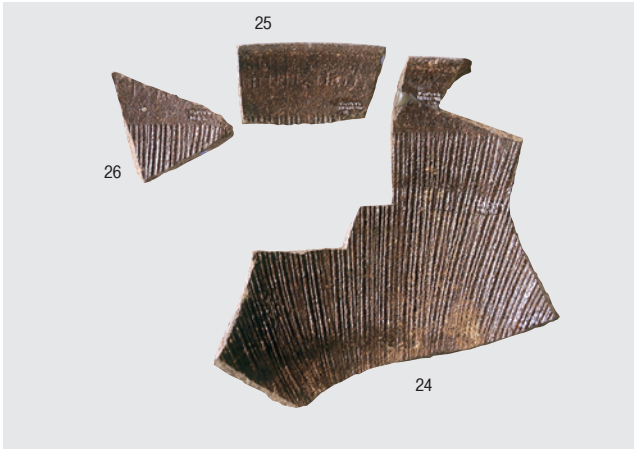
15

23

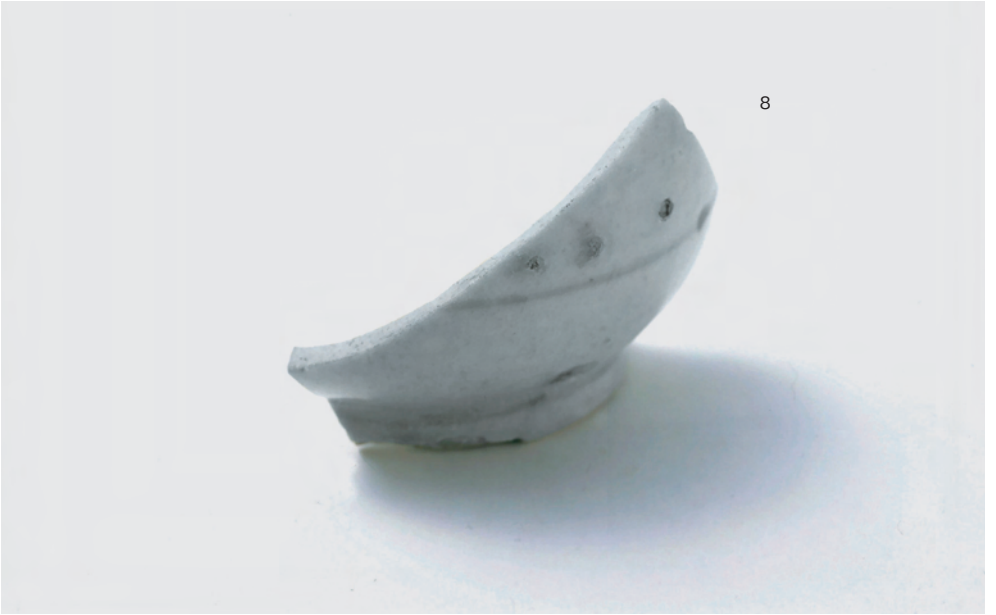
陶磁器







陶磁器



陶磁器

陶磁器

環状土製品

銭貨

ＳＤ２出土鉄製品

ＳＤ２出土鉄製品

報告書抄録

ふりがな	でっぱりざかじょうあとだい１・２じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	出張坂城跡第１・２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第199集
編著者名	福岡和彦　佐藤智幸
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2012年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
でっぱりざかじょうあと 出張坂城跡	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 しもしみず 下清水 あざみずじり 字水尻	6203	019	38°43′16″	139°46′	20101101 ～ 20101130 （第１次） 20110509 ～ 20110617 （第２次）	600㎡	国道７号 鶴岡バイ パス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
でっぱりざかじょうあと 出張坂城跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡　1 集石遺構　1 溝跡　1 柱穴　11	中世陶器 近世陶器磁器 近現代陶器磁器 銭貨 近現代鉄製品	（文化財認定箱数：10）

要約

出張坂城跡は庄内平野の南西部、大山川と湯尻川に挟まれた標高30～50ｍの丘陵上にあり、築城時期や築城者は不明ながら、16世紀には武藤氏が居城した城として知られている。

調査の結果、検出した４つの曲輪のうち、Ａ区の少し下段から、城を取り巻く曲輪の１つと考えられる幅１ｍ程の犬走りと想定される遺構を検出した。Ｂ区からは２×２間の掘立柱建物跡１棟、溝跡と集石遺構をそれぞれ１基ずつ検出した。遺構に伴った遺物や放射性炭素年代測定の結果、掘立柱建物跡は城が成立していた時期にあたり、溝跡は近世以降に造られた遺構ではないかと推定される。

出土した遺物は、縄文土器から土師器や瓦質土器、銭貨や近現代の陶磁器片までと幅広い時代のものであるが、いずれも破片資料であることから、どこからか持ち込まれたものではないかと考えられる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第199集

出張坂城跡第１・２次発掘調査報告書

2012年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　大場印刷株式会社
〒990-2251　山形県山形市立谷川二丁目485-2
電話　023-686-6155